WASON
LQ
...
C774

Feb. 1900
no. 505

明治三十三年二月十四日

女學雜誌

第五百五號

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

第五百五號目次

◎社說
傳道支義
自由傳道來歷…………………村田平三郎

◎文藝
紫の舍言話
獸は誰にもつくれる事…………湯谷紫苑山人

◎開書
奉圖洲樹越秀君閣下書(下)…………青柳猛

◎講義
雜飾論一斑(上)…………山形東根

◎史傳
楓内傳(故稅所敦子)…………落花漁人

◎亞米利加だより
歐米文學通信…………………証下庵

◎隨感
紳士は金魚の如し　大國とは大人ある國なり
○放任即全權(事業の生命(南洲先生の政治學
○福田行誡師○政治學○取らざるの愛(戀の淺
瀨(吁思ふまじ思ふまじ(戀愛聖戀○生死分界
ありや○たむけ草
懷故若松賤子女史……………朝比奈天行

◎雜錄
海舟先生逸話○驚醉の記(黑光女史)(夢の世の
(若葉の子)(

◎寄書
老孃論(飛雲生)○孃々論(日本人)

◎通信
女社會學答(羽前鶴岡)

◎片々

◎時報

社告

◎本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す
◎十日發行の分は稍や平易實際の記事を專にし、第一、家庭の整理改善に益あるべき事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學宗教及び教育等に對する書籍の卑見を陳述し、大に世上君子に問はんとするを旨とす。
◎單に十日發行の分のみ又は廿五日發行の分のみを指定して所望せらるゝもあらば其の需めに應ずべし

●女學雜誌定價表●

前金	壹冊定價	拾錢
	半年分定價	壹圓拾錢
	一年分定價	貳圓
	(内國無郵稅)	

代金は總て前金にて御注文ありたし◎年來引續き購讀の諸君にて前金切れ候共御斷無之間は引續き發送するとも可有之事◎但し其節は總て一冊十錢の割にて計算し追て請求可致事是れ誠に不本意乍ら計算の煩はしき不得止右樣仕候間かれて御承知置被下度候

廣告料	一行(廿二字詰)一回	前金拾錢
	同　三回以上	一割引
	同　六回以上	二割引

送金　送金は東京巣鴨郵便支局に宛て小爲替にせられたし、郵便切手にて送らるゝ人は總て一割增にて計算せられたし

明治三十三年二月十日印刷
明治三十三年二月十日發行
編輯人　嚴本善治
印刷人　布川孫市
東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚二百四十六番地
發行所　女學雜誌社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場
(電話番町十九番)

紫の舍公告

余さきに池袋清風大人に就きて敷島の道に入りそめしより、おぼつかなくも、たどり來りしと茲に數年、やゝ諸家の說を聞きつゝも、殊に香川翁の高見に推服する所あり。爾來歩一歩、ますます前途の杳茫として遼遠なるに驚きぬ。故にもとより敢て自ら得たる所ありしと云ふにあらず。然りと雖も輓近人心のいよいよ浮華に流れて、誠實すくなく、詩人の虛名をてらいて放逸なるに驚ろかずんばあらず。是れ即ち有志者と同もに、詩美神の名に於て、慨すべきの至りにあらずや。故に茲に同好の士女諸子と共に一社を結び、相共に研鑽して、斯道の機微を明らめ、あはせて詩美神の祭壇に跪きて、心より誠實の牲をさゝげんとを期す。是を以て、先進者には指導せられ、後進者とは共に相提携して、道に進まんとす。是れ本會の要旨なり。豈別に他意ありせんや。

寄稿者は、左の條件を知了せられたし、

一　元と余暇を偷みて從事するものなるが故に返稿は事情の許す限りに於て速かなるべきと
二　佳作と認めしものは之を女學雜誌帋上に掲載して同好の人に割愛すべきと
三　返稿の爲に、相當の郵券を送附せられ度と但し前述せしが如き旨趣なる故に敢て期定の報酬を要せず、友誼の爲とては、賜るも可なり。賜わらざるも亦可なり。

東京駒込郵便區、巣鴨村庚申塚
紫の舍あるじ　湯谷紫苑

おもふさち袖ふりはへてむさしのゝ
むかしのゆかりいてて見ましや

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第五百五號

明治三十三年二月十四日發兌

社説

傳道玄義

傳道界に慶事あるヿ尠なし。豈只だ慶事尠なきのみならんや、實に新らしきヿの尠なきなり。平々凡々、陳腐々々、眞に人をして厭倦せしむ。

然りと雖とも、大道素と恬淡、之に新らしきヿのあるべき筈なし。先聖後賢相傳ふる所のもの古來唯一、何んぞ之に新奇を求めん哉。吾人の所云ゆる倦厭と爲す所ろのものは、生氣なく、血誠なき空文形式の依然として唯久しく横行するを嫌へるの意義なり。

凡そ、傳道の事は、先づ自から道を求めたるに創まり、自から之を得たるに熟し、微笑獨樂、衷心禁じかたき所以のものありて、遂に之を人に施こさゞるを得ざるに至るを定とす。

左れば、自得せざるものに傳道あるヿなし。自得せざるものの傳道は、道の形式を傳うるに過ざる也。使徒曰く、金錢は我に無し、我が得たるものを汝等に與ふ、ナザレのエスの名によりて立つて歩めと。即はち是れ也。

曩に、近江水口の傳道者村田平三郎氏の寄贈に係る小冊子を讀む。題して『自由傳道來歷一班』と云ふ。眞に是れ近來稀有の好著作。否な著作とは言わじ、眞とに實信篤行の告白、生ける血を以て記るされたる經歴談にてありき。吾人は前に村田氏を知らず、今尚ほ其人を見ずと雖とも、其の質實なる文章の鼓動に耳を當て、其の活動せる脈絡の誠意に心を通じて、確かに言外の趣味を察し得たりと信ず。必らずや是れ久しく傳道に苦心して、正さに一道の妙味に悟入し、堅牢不抜、而して唯信微笑の聖域に達して、自在自由の傳道心を愛撫しつつある人ならんと信じたり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

故に茲に此の小冊子の爲に一言を附して世上に問へるとありしに、四面毫も反響なし。人皆な之を讀まざる乎、讀んで全たく顧みざる乎、顧りみて其美を認ためざる乎、何んぞ其の冷々たるとの甚しきや。吾人頗ぶる遺憾に堪へず。今や左に其の全文を轉載して、吾が紙上の讀者に示すものは、吾讀者には、必らず吾人に同情を寄せらるべき者の多からんと信ずれば也。

嗚呼、貴者は稀に得、天才は最とも得がたし。時に天啓の特賜を蒙むりたるものは、眞に一代の珍なり。吾人が之を惜しむもの、豈に何んぞ其人の爲とせんや。

自由傳道來歴一斑

左に掲るものは自由傳道レプタ會發起後一ヶ年の後即明治三十年末に至りて報告書の必要を感じて印刷せしものなり

江州水口自由傳道レプタ會之起因及經歴並に報告

本會は事はづかた、當地傳道の不振挽回而已を目的として、對筵せしが故に、當時賛助を願ひたる方々へも、委細の事情は報ぜざりしが、事意外にも諸兄姉方の同情に由て、甚だ好結果を見る事を得たれば、本會は今茲に本會の起因を說明し、且つ事業の經歴を叙し、併せて會計收支決算の報告を爲んが爲、一冊の年報を綴りて以て、本會の好友知己に見へんと欲す。

夫れ本會の起因たるや、蓋し一朝一夕の事にあらず、請ふ今之を左に述ん、昨明治二十九年七月余が當地に赴任せし當時、此地傳道の情況は實に寂漠たる者にして、當地在住信徒はわづかに五六名、加之講義所新築負債貳百五十餘圓を存し、爲に信徒の信仰は一層衰弱し、精神萎靡も振はざるが故に、世人を感化するが如き事は望むべくもあらず、日曜集會の如きも一二人を出ざる程なれば、如何なる工夫盡力も、霧を摑ふて井に埋ると一般、勞して功なければ、余は日夜憂苦おく能はざりしも、神は恒に一種云ふべからざるの希望を余の前途に置きて、忍ばせ給ひしが、今子細に之を考究し來れば、其一種云ふ可からざりし處の希望は、之本會設立の起因にてありしなり。

人事必竟之神事

抑も本會の茲に起らんとする蓋し人事にあらざるなり、當地傳道不振の源因たる、固より一にして足らざるべしと雖も、誇する處堅嶮々險の顧れざるが爲にして、其又由來する處を究むるに、當地傳道方法に活力なきの致す處なれば、茲に是非とも必要なるは、精神的活動力にして、一呼して萬作を躍らしむる大能力を得るの途を講ぜずんばある可らざるの一事之也。語に曰く山窮まれば水生ずと、又曰く人事前に盡くれば天理後へに應ずと、言は誠に宜なる哉、當地傳道の命運は既に絶滅の域に迫りて、今や機一轉活路將に開けんとす。是偏に全智全能の深き攝理の存する處にして、人智人力の遠く企て及ぶ處にあらざる也。

本立て道生ず

余一日折を得たれば、兄姉等と熟議なし、傳道振起の一策として、漸く傳道に關

する全權を余に一任あらんことを請求せしに、兄姉等は全く之を諾せられたり、拔て余が此全權を兄姉等に請求せし所以のものは他なし、必竟從來の傳道方法をして、喘嗟の間に根本的大改革を試んが爲のみ。既に確信する處あり、又傳道の全權も一任せられて、當地傳道事業成敗の責任殆ど余一人に歸し來りて、余が一劃一策は愈々至誠至理ならざる可からず。余や誠に不肖固より其器にあらざるも、勢ひ已に大河を背後に陣取せる軍隊の如く、進も死、退も死ある而已、今や器量を論ずる秋ならず、エホバ神の命令は唯直進せよと聞ゆ、然れども余は屡右往左往躊躇逡巡せり、而して後余は漸くに止を得ざるが如くに、エホバ神の命令に從ひて歩一歩と前進せり。然るに不思議なるかな決心は決心を呼起し、覺悟は又覺悟を固くし、熱禱は熱禱を産み、余が心情は茲に一變して恍惚となり、靈眼忽ち開けて前に寳潮の洋々たるあり、後へには靈泉の滾々たるあるを觀る、時に又聲ありて切に聞ゆ、汝飽まで掬め飽まで息ふべしと。余や思はず一掬し思はず一息せしに、靈眼愈明にして、未だ曾て知ざりし處のものを觀る事を得て、恰も彼ペテロの所謂、主よ我儕こゝに居ば善、もし聖旨に適はゞ我儕に三の廬を建させ給へ、一は主の爲、一はモーセの爲、一はエリヤの爲にせんとの消息に倣て、余は實に消極的となり、隱遁主義となりて、曰く、チー神よ我こゝに居はよし、又此靈境を去つて、訪問や、說教や、祈禱會や親睦會等に行事は欲はずと。然るに神は余の願を許し給はず。反て大なる働を爲すべく一の使命を賜はれり。余や辭するに言なく、復も止を得ざるが如くに彼靈境を出にけり。

而して後靜に思ひ廻らすに、抑も傳道の事たる固これ神業たり、一宗一派に拘泥し、一町一郡に踟蹰たる可らず、宜しく諸宗を友となし、大日本を教化するの抱負なかる可らず、又傳道者は天神に代りて其福音を宣傳するものなれば、些々たる情實、積弊に纒綿せられて、因循姑息なる可らず、宜しく不羈獨立の識見を振つて以て、其職責を盡さゞる可らずと、茲に於て余は斷乎として萬障を打破し、人の事を顧みず、唯天父にのみ事ふるの立脚地に立ち、漸く新傳道方法劃策に着手するに至れり。

自由傳道レプタ會の誕生

曰く本會は余が今日までの情實、積弊、規則、習慣等に拘泥せず、市中、郡内、縣下、縣外の區別なく、全然余が心の欲する處に止まり、余が心の欲する時に歸り、時に市中に時に郡内に、縣下に、縣外に、祈りと共に往き、祈と共に止り、祈りと共に歸り、說教と云はず、演說と云はず、祈禱會と云はず、訪問と云はず、談話と云はず、働きと云はず、遊と云はず、起ると云はず、寢ると云はず、一進一退、一擧一動、一思一考、更に束縛せらるゝことなく、最も自由に最も自在に余が心の欲する處に從ふて傳道を爲す事とせるより、自由傳道の名稱を蒙らせし所以にして、其又レプタ會と云ふ所以のものも大いに故あり、曰く既に傳道の事一任せられ、又傳道方法も確定せるを以て、之が運用に供するの財源なかる可らず、然るに信徒は少數なり、負債は山の如く、加ふるに月々の經費を負擔せる兄姉等に向ひ、重て新傳道費出金を促すは斷腸も啻ならざる思あり、去ながら之が運用の費用なくんば、萬謀破れて事悉く水泡に歸し、又如何ともするなし、聞く大義を採るもの時に親を滅すと云ふ、余豈私情の奴たるべけんやと、近くは之を兄姉等に、遠くは之を知己朋友等に訴へて、特志の寄附を求むるに至りしを以て、レプタなる語を加へたる次第なり。

一ヶ年間の傳道經歴

既に新傳道方法成、之が財源も定りたれば、愈以て之が實施は始まれり、茲に一年間之を試みたるに、事として成らざるなく、處として歡迎せられざるなく、止る處として祝福を蒙らざるなく、郡内傳道地（三雲、菩提寺、深川、寺庄、信樂、日野）を巡回する事

二十餘回、縣下各教會（草津、八幡、彦根、長濱、大津）を安問すること都合二回、縣外に出しては今春二月伊賀上野に、初夏伊勢津市、同久居等の教會、講義所を安問し、又初秋には遠く丹波の國、龜岡教會、須知教會、檜山講義所、福知山教會、綾部教會、田野講義所、山家講義所、丹波の國、舞鶴講義所、宮津教會、越前の國、福井教會、武生傳道地等此行全く三十有九日、行程一百有餘里、此冬再び伊勢の國、津及久居及波瀬等等に到る所に於て説教及演説を爲し、又潔き宗教的交際を爲し、或は内に或は外に、自由自在に、傳道する事を得て、未だ一日失意せる事なし、事はづかに一ヶ年の業なれば、固より之と見るべきものなきが如くなるも、顧みて昨年赴任當時の困難を思へば、内は次第に面目を改め、新舊信徒も大いに減少し、郡内の傳道術好都合にして、剰へ縣下縣外の諸教會を安問する事を得たるが如きの、一大快事を爲し得たるは、實に自由傳道レプタ會の妙法妙用の功に之れ由ると云ふも敢て誇大の言ならず。

本會成立一奇怪

本會は別に規則を設けず、又會長と稱するものなく、唯一人の會主と、一人の會僕と、幾多の會友（但し同情者を云ふ）を有するのみ、而して本會の會主は即不肖にして、會僕も亦不肖なり、故に不肖の信仰は本會の信仰にして、本會の働きは即不肖の働きに外ならず、本會に一冊の會計及日記帳ありて其首條に記して曰く、本會は全く無規則にして、唯金錢の出納を明にし、傳道日記を細密にし、以て神の聖業の一端をうかゞはんとするものなり、即ち、天に在す我儕の父よ、願くは爾名を尊崇させ、爾國を臨らせ、爾旨の天に成る如く、地にも成させ給へとの、祈禱の應驗を見んとするにあるのみと、記し置きぬ、本會成立の奇怪なる凡そ斯く如し。

本會信仰の發達

本會は茲に信仰の發達を告白なし、尚益進んで完全なる信仰に、到達せん事を望むものなり、曰く本會の起るや職として、専ら天父の正義、天父の攝理、天父の至愛及聖靈の無所不在、聖靈の守護、聖靈の交り、聖靈の示導、聖靈の恩寵等を宣傳して怠らざりしが、本年末に至り、大救主イエスキリストの神なる事、吾人は之を禮拜すべき事、之に祈禱を捧ぐべき事、之が教を信奉すべき事、之が靈を蒙るべき事、吾人にして若し其教を信奉し、其名を尊み、其交に入る時は、云ふ可らざるの喜び、平安、勇氣、祝福、恩寵、喜樂等を以て滿され、大なる滿足を得ることを證するに至れり、

曰くイエスキリストの教へ、
曰くイエスキリストの靈ま、
曰くイエスキリストの御名、

之等は本會が今後大いに宣傳せんと欲する所の題目として新に所信を加へたる所なり。

本會の願望

本會は茲に一年を經過し、又來らんとする一年を望んで、益奮勵し以て斯の事業を擴張せんと欲す、伏て請ふ本會の好友知己諸君、幸に來年も亦本會の爲に、充分の御同情を寄せられ、本會の願望を遂せしめられん事を、本會は本會へ同情を寄せられし、諸君の芳名を左に列記して、大いに感謝の意を表し、目出度本年の業務を終らんとす、幸に是に由て又本會の動靜如何をも、諒察し賜ん事を請ふと云爾。

江州水口　自由傳道レプタ會々主會僕

明治三十年十二月　村田平三郎敬白

＊　＊　＊　＊　＊　＊

但し芳名列記及決算報告書を略さす。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

左に掲るものは即明治三十一年一月新調せる自由傳道レプタ會用日記帳の卷首に記し置たるものにして大略前帳に異らずと雖ども本會發達に關する預言とも云ふべきものあれば重複する處あるも顧みずして掲げし所以なり

本會之主意

本會は全く無規則にして唯金錢出納を明にし、傳道日記を細密にし、以て神の聖業の一端をうかゞはんとするものなり、即ち、

天に在す我儕の父よ、願は爾名を尊崇させ、爾國を臨らせ、爾旨の天に成如く、地にも成させ給へとの、祈禱の應驗を認んとするにある而已。

釋して曰く、傳道の業未だ盛ならざるに、徒に規律を嚴守して奔命に疲るゝは、決して聖靈の導に遵ふ活道にあらず、本會にして若し斷然人爲的行動を全廢して、全然聖靈の示導に而已遵ひなば、後日必ず見るべきの一大傳道の舉り來るを確信するが故に、本會は今務めて如斯簡單なる組織を以て成立次第にして、自由傳道の名の由て來りし所以なり。

* * * * *

此年五月を以て當講義所新築負債、壹百九拾餘圓は、一週連夜の祈禱會と、不思議なる天父の應答とに由りて、目出度消却せられたり。

自由傳道之變遷期

本會は以上陳述せる如くにして、三十一年中も奮勵以て進みしも、尚未だ盡さゞる所ありて、途は絕え、力らは挫け、遂に進退谷まりしが、活路又開けて自由傳道は、更に一段の大變遷を爲ぬ、即以上は水口基督教講義所内一部の自由傳道レプタ會也しも、以下は一個獨特の自由傳道たり、以上は試驗的自由傳道也しも、以下は大學的自由傳道たり、以上はレプタ制度に由りて立ち、以下は之をも放棄して立つに至れり、今其事情は左の一章に由て明なり

但し其一章は、余が明治三十一年末より、同三十二年三月初旬に至る、殆ど六十餘日間、密室にありて、祈禱の小生涯を送りし間に、起りし事實を必用ありて綴りなせるものなり、

◎自由傳道舉行の由來及方法

余曾て越後にありて、自ら進んで身を傳道界に投ぜん事を決心せる時、一日先師某氏を訪ひ、告げて云ひし事あり、不肖愈今日より傳道界に入らん事を決定せしが、不肖の第一に覺悟せる事は、世界無二の最小傳者を以て甘ぜん事なりと、事體固より斯の如きが故に、余は始より智者學者及人物を以て立んとせしにはあらで、寧ろ反て無學短才不人物を以て立ち、自ら信じて救はれたる、十字架の教を、廣く世人にも傳んものと、以來粉骨碎身以て事に當ること數年に渡ると雖ども、更に初志を爲すべくもあらず、即ち余が人生最大の福として、以て人に與んとする處のものは、人反て之を糞土の如くにして更に顧みず、人の好んで求むる處のものは、余の心既に巳に土塊視する處、參る處として斯の如きトンチンカンの歲月を送らざるはなし。余や初志に顧る毎に遺憾千萬遣る方なく、愈事に勵精すれば益トンチンカンの調子を高むるに至る、人誰か啞然たらざらんと欲するも豈夫れ得べけんや。

時は明治二十有九年、即余が當地に赴任せし歲の暮つ方なりし、感慨切に我を驅りて傳道上の事を思ひ運らしむること數日、一夜氣倦み體疲れて唯茫然たりし時、忽ち聲ありて曰く、汝が時々思浮ぶ處の自由傳道を實行せよ、之汝の糧なりと、余や忽ち再生の思を爲し、抃舞雀躍して大いに喜び、事殆ど成就せるものゝ如くに思ひて、數日間は恰も狂人の如くなりしが、退て靜に前途を思へば、嗚呼之も

亦容易の事業にあらざるなり、然れども天命既に之を爲すと云ふ、今にして若之に逆はざらん乎、我又誰と共にか語らん、明語すべき時にあらずと、耶命之に從ひて、千辛萬苦に行き、萬苦法なきに進み、漸く茲に二星霜を經過し來りて、之が事跡を回顧すれば、教化大いに行はれ、神跡歴然として見るべきもの稀ならずと云ふと雖も、事固立前自由傳道にあらざるが故に、尚ほ思ふ存分に識見を實行する能はずして、感化其功を奏することも遅く、折角の自由傳道妙法も大成遂に期し難く、加之天父の大命にも逆はざるべからざるに至り、今や一大失望に満されて殆どやるせなく、黙然自失或は全なきを嘆き、又或は無謂なきがこらなとしてありしに突然心機一轉より、一念冒起し來りて切に思へらく、今や明れば路ひ始と不盡に迫し、今にして事を成す能はずんば、愈よ無窮の僕として、牛の踏暗に逐やられ、其庭にて哀哭切齒するの外なけん、來れ明治三十三年よ來れ、愈よ來る三十三年こそ、萬苦凡て自由傳道なしで宿志を遂げしめんには、[illegible]の役に關するも門より出ずる處なりと、過去の失敗と、將來の大希望と、暗明交々戰ひつゝ、今は見はず知らず、又一と暗中に突込みて、容易に脱れ出る能はざるに至れり

一日一夜身にわり、二日二夜身にわり、三日三夜も祈禱に耽りて、[illegible]年の苦みを捨めつゝも、[illegible]神は今は我を見捨て給ふなり、我等此苦を忍んやと、[illegible]祈禱、[illegible]黒夜中宿鴉に晴れ、[illegible]眞理輝き始め、漸く我に望みを與し、[illegible]りて室内に照すが如くに、大堤の光り我[illegible]かげだに見えずなり、死の苦痛も已に失せて跡なく、[illegible]如く、自由傳道獨立の氣概に充ち、[illegible]其在自若として明治三十三年は迎へられぬ、

（時に文あり我家の國旗と云ふ本文に關係最も多きが故に之を左に掲ぐ）

○我家の國旗

日本國民として祝日大祭日等に、家々國旗を出すは普通一般の事なれども、特に我家の國旗と題せしは、いさゝか理由ある事なれば、事めづらしくも左に述べん、

抑も吾人が一家を興せしは、今より七八年前の事なりしが、赤貧洗ふが如くにて、年來一旒の國旗だに買ふに餘力なく、爲にいつの祝祭日とても、國旗を出す能はざりしを京都なる慈母が、かりそめにも身傳道師でありながら、國旗だになきは世間に對して面目なしとや思ひけん、一昨年出京の折、慈母を訪ふて別るゝの際、慈母は一個の紙包を出して曰く、之は誠に粗末なものなれど、國旗がない樣子だから、此間一つ求めて置きました、御祭の日には必ずお樹なさいとて、賜りたるを押いたゞき、持歸りて其由妻子等にも物語り、之から祝祭日には、國旗が出せると、互に打喜びたりしが、其後ひそかに思へらく、今や吾は國旗は出來たるも、我未だ國民たる識見も定せず、傳道の主義方針明確ならず、心霊の修養も未だ妙理に達し得ざれば、折角此邦土に生れながら、何等以て國恩に報ゆる能はずして、唯徒らに今其國旗を出せばとて何の安かこれあらん、[illegible]なる者なるも、幸に生を此邦土に與く、何事か今に報ゆるの道を得ずんば、寧ろ國旗を出すまじと決心し、慈母が好意に逆ふにもかゝはらず、深く藏めて自ら責め、千辛万苦只々日月を重ねしを、實に可惜におぼせしにや、[illegible]故に[illegible]からしめ、[illegible]ならざるが故に賢からしめ、年來の希望は已に、不知不識の間に充分に達せしめられたることを悟り、一日大いに感謝し、來る明治三十三年一月元旦より、彼國旗を高く揭げて、我已に此世に勝てりとの心意を發表せずんばあらずと、知人の家にて青竹一本をもらひ來り、大晦日半日を費して、竹竿を調製し、即ち本年一月元日、大感謝の情に充されつゝ、之を門外に高く揭げ、妻子を呼んで指示し、國と家とを祝さしめたるが、嗚呼是ぞ之、我等が[illegible]して、飢渴の犠牲に供する事を、覺悟せる父が斷腸の試に、打勝ち得たる印ぞ

とば、知らで喜ぶ彼等の顔を見る、其刹那、無量の感慨浮び來て、悲喜哀樂の情緒を禁じ難かりき。

事情已に斯の如くんば、余は今茲に明確に、余が此世に打勝得たる、心事の一般を告白するは、余及余が家の將來に取りて、最も切要の事なりと思ふが故に、其の次第を陳んと欲す。

曰く我已に妻子等をして、假令飢餓の犧牲者たらしむべき事あるも、いさゝか厭はざるべきを、天父に向ひて誓ひたれば、又何物か來り我をなやます事を得ん、パウロの所謂或は死、或は生、或は天使、或は執政、或は有能、或は今あるもの、或は後あらんもの、或は高き、或は深き、また他の受造物の如き、固より意とする所にあらず、まして況んや富何かあらん、貧何かあらん、成るも敗るゝも何かあらん、用ひらるゝも捨らるゝも何かあらん、譽らるゝも譏らるゝも亦何かあらんと…… 此心之即余が此世に打勝得たる心事なり…… 此心之即彼國旗を揭げて、國と家とを祝さしめたる心事なり…… 此心之即無量の感慨浮び來て、悲喜哀樂の情緒を禁じ難かりし心事なり。

明治三十二春は暗々黑々の中より靜々徐々として來りぬ、遠く初烏は叫びぬ、近く雞はうたひぬ、雀は囀りぬ、家々戶々に國旗は飜りぬ、同窓の人々は早名刺を投じて去りぬ、郵便物は投込まれぬ、祝の雜煮は調ひぬ、自由傳道獨立實行の爲に、天父の祝福は求められぬ、而して以來日々夜々專ら之が爲に禱り、又考へ、又思ひ巡らしめ、下手の考は休に如かずで、何の妙案も出ずして、反て思煩のみ群り起りぬ、爲に時々途方に暮れぬ、光陰は我の鈍に頓着せずして過行ぬ、昨年末の打撃胸算は違ひ始めぬ、泰然自若は根本的に動ぎ來て、之では迚もダメだと將に拂子も投出されんとする、刹那に聲あり曰く、汝少子よ、考ふる事を止めよ思煩ふ事勿れ、人を懼れ、又世を憚るに及ばず、只夫れ我に在りて、大丈夫の如くあれかしと、余や茲に於て又一段の確信を得て以來、時々刻々恩寵に恩寵を加へられ、手の舞ひ足の蹈む處を知らず決心愈固くして、余は今後如何なる事情あるも、再背職に安ずる能はざるに至りぬ、因て益之が準備を調へんと步武を進め妻子を養ふべき衣食の問題に立至りて、又も數日間種々工夫し、祈禱を重ねしも、更に安ずる處なく、精神いたく衰へて一夜熟睡せる時、靈夢忽ち到る曰く、

絲草繁茂せる淡々たる原野に、余一人横たはりて悠々自適し居たりしに、天使あり何處ともなく語るらく君さまでに衣食の事を思煩ふとは如何なる故にやと、聞事兩三回にして余は思ひ出ぬ、此絲々たる原野は之エホバの牧場ならん、其處に横たはれる我は之即エホバの羊ならん、只夫れ一疋の羊にして尚斯の如き廣原に養はるゝは、正しく之我等の爲めに衣食備へられて餘ありとの敎へかや、思へば余が履は衣食の爲めに心思を勞せしは、何たるタワイモなき事なりしよ、妻子に對し、世人に對し、又天地に對し、神に對し、恥ぢ之より甚しきはなし、嗚呼我久しく惑てり、止みなん〳〵、我が職責は天父の大命に遵ひて、

自由傳道の準備を誤らざらん事なりと、

半睡半醒の間に繰反しつゝありしに、驚き、決然として起ちて再び衣食の事を思はじと誓ひ、厳然として又坐して懺悔の祈禱を献け、茲に於て愈人事を思ふ事を斷念し、是より全心全靈を神前に傾注して以て、其主義や……其方針や……其目的や……其態度や……場所や……資源や……精神や……如何なすべき哉と日々之を神に問ひ、夜な〳〵之を神に諮ぬたるに、日一日……夜一夜と、次第〳〵に敎へられたるは即左の如し、

＊　＊　＊　＊　＊　＊

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

主義　互に愛を貰ふの外、又何物をも人に貰ふ事なく、又人にも貰はしめず悠々自適して、福音の鑽火を人心に投入するにあり、

方針　全く教會事業以外にありて、專ら個人的に、悔改、信仰、大懺悔、大感謝、愛神、愛人、等の道を自得せしむるにあり、

目的　大救主基督の教示の如く、御名を崇めさせ、御國を臨らせ、御旨の天に成如く、地にもなさせん事を期するにあり、

體度　基督教各派諸教會は、神の光榮を顯す爲めに、設けられたるものなれば、何れも皆神聖なるものと確信し、我自由傳道は全く之が前驅者、即野に呼べる人の聲たらん事を以て任ずるにあり、

場所　近江國甲賀郡水口町を根點となし、悠々自適して際涯なかるべし、

資源　懼るゝ勿れ唯信ぜよとの之也、

前途　無難なる乎、或は困みか、迫害か、饑饉か、裸裎か、危險か、刀劍なるか、將又成功か、之を知るものは唯夫れ神あるのみ、

責任　我神エホバ即天の父に在り、如何となれば、我何事をも自ら行ふ事能はず、唯聞處に從ふて行ふのみなればなり、

＊　＊　＊　＊　＊

以上斯の如くにして愈自由傳道獨立擧行の事を決定したる次第なり。

附録

自由傳道の大抱負

（一）自由傳道は妙中の最も妙なるものにして、容易に人に知らしめ難し、今試に之を芥子粒の中に藏するも、倍蓰粹々として窮極なく、之を宇内に擴張すれば、滔々乎として際涯ある事なし、人に知らしめ難き所以なり。

（二）自由傳道とは何ぞや、曰く宗派の羈絆なければ、更に傳道競爭の心配なく、教會なければ、盛衰榮枯の苦心もなく、義理人情以上に、利害得失の外に、大小輕重の差も、賢愚貧富の別もなく、只管靈的に之道ふて、以て悠々自適するにあり、大靑バプテスマのヨハネ斯の如くし、大救主イエスキリストも斯の如くになし、使徒パウロも亦斯の如くに爲せり、是之を自由傳道とは云ふなり。

（三）自由傳道は世人を我宗教に引き込むにあらずして、其心に活る基督教の眞理を投込むにあり、故に惡人は之を聞きて益苦み、義人は之を聞きて愈慰めらる、苦むものよ悔改して善人となれ、慰むものよ愈進んで大義人たれ。

（四）自由傳道は絶對的に禁酒を强ひず、禁烟を促さず、又別に改宗をも迫らず、洗禮をもすゝめざるが故に、天下到る處何人と雖ども、遠慮なく之を聞き、勝手に取り、又勝手に捨ることを得る也、之を取るものには祝福忽ち加はり、之を捨るものには、天罰忽然として其頭上に留まる、謹んで閑事を徒らにする事勿れ。

（五）來れよ來れよ大いに來れ、姦淫するものも來れ、盗みするものも來れ、罵るものも來れ、殺すものも來れ、怠るものも來れ、弱きものも來れ、愚人も來れ、智者も來れ、學者も來れ、賢者も來れ、聖人も亦來らざる事勿れ、預言者なるを以てその預言者を接るものは、預言者の報賞を受け、義しきを以て其義を接るものは義人の報賞を受く、イエスキリストの弟子なるを以て、小き一人のものを受るものは、即キリストを接け、又天父を接るなり、其處に眞理は山の如く、此處に恩寵は海の如し、來れよ來れよ大いに來れ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

辭職前後の日記

三月一日自由傳道の來歷一班は、前述の如くにして全く準備調ひたれば、愈辭職申込の爲め、京都ミッションへ出張せざる可らざるに至りて思へらく、之甚重且つ大なる事件なり、萬一にも事を輕擧に失して後臍を嚙むことありては、神名を猥にし宗教を玩弄するの罪人たるを免る可らざれば、今や充分の注意を爲ざる可らず、今直に出京せんよりも、途を伊勢の津に、四日市に、桑名に、名古屋に、江州は湖東に、諸友を訪ひ、事の次第を陳述して、以て諸友の忠告をも聞き、旁た自由傳道を實行しつゝ行きなば、神は其旅中に於て尙充分なる訓練を賜はるべく、自己も亦此間に於て素養する處ありて、辭職を叮重にし、事を終始に謹むを得べしと、玆には義理として、人情として、忍難き事もあり、耐へ難き情も種々之ありしにも係らず、斷然玆に賢者となり、聾者となり、入非人なりて、以て旅程を預定なし、愈三月六日出立と定めたるに、教會にては四日の夜を以て送別祈禱會を開かれ、謹嚴なる祈禱會を以て送別せられたり、

三月六日傳道地三雲に傳道し辭職の事情を告白す、

七日傳道地菩提寺にて傳道して、辭職の事情を告白す、

八日傳道地深川にて一人の姉妹を訪ひ、辭職の事情を告白なし、別れて伊勢に向ふ、伊勢津市に知已を訪ふて逢はず、此夜三人の姉妹に自由傳道を試む、

九日より十四日に至る六日間、四日市日本督教會牧師の家にありて、自由傳道を爲し諸兄姉の歡迎を受く

十五日より十九に至る五日間、桑名監督教會傳道師の家にあり、第七回の自由傳道を爲して大いに歡迎せらる、

二十日より二十二日の三日間名古屋杉田牧師の家にありて、數名の知人を訪ひ、或は自由傳道を爲し、或は知人の高見か聞き、一回の演說を爲して、岐阜市日本基督教會傳道師なる外村君を訪へり、

二十二日より二十四日、三日間岐阜市日本基督及監督兩教會の依賴に由て、四度の自由傳道を爲して、著しき恩寵に沐浴せり、

二十五日より二十八日まで四日間、江州長濱にありて組合教會及監督教會にて、數回自由傳道をなし非常なる歡迎を蒙る、但し此時咽喉を痛む、

二十九三十の兩日彥根にありて休養す、

三十一日京都に入りて直に知已を訪ひ、自由傳道擧行の由來を談り厚き同情を表せられたり、

四月一日午前余は京都ミッション委員なる宣教師デビス教師を訪ひ、事の來歷を陳述し以て、愈辭職の旨を申込みたるに、教師も事已に玆に至りし以上は、止むるも益なかるべしとて、辭職の次第を承諾ありて後、教師の厚意と祈禱を受けて拜謝告別せり、一事漸く終れば一事將に大に始まらんとす、若夫れ天父の大助なくんば誰か其任に耐ゆることを得ん、オー在天の父よ不肖の僕を助け給へアーメン、

夜家兄に自由傳道の來歷を談り、將來の目的を談り大いに贊同を得たり、

二日愛隣教會に於て朝夕二回自由傳道圖解の說明を爲す、

三日午前或處にて數名の兄姉等に傳道圖解の說明を爲したり、

夜鴨川河畔林牧場に於て二十八名の集りに於て、傳道圖解の說明を爲せり、

四日咽喉病愈甚を加ふ、

五日午後大阪に向ふ、

六日大阪教會に開かれし第十四回組合教會の總會に出席す、

七日咽喉病益惡しきを加へ談話に堪えずして、明石なる湊病院に入る、

十日咽喉殆ど全治して退院せり、夫より十六日まで原牧師の好意に由牧師の家に靜養せしめられたり、

十六日午前明石教會に於て說教し、午後傳道圖解の說明を爲し、夜再說教せり、

十七日神戶に向ふ、

十八日傳道女學校に、一姉妹を訪ひしに、一場の勸を求められ、余は直に傳道圖解を出して說明せるに、七八人の姉妹等は大なる感動を以て之を聞き、熱心なる祈禱の聲續々興り來りて止まず、小リバイバルの如かりし、

夜一兄弟を訪ふて一家族の爲に傳道圖解を說きて大いに喜ばれ、明晚多聞教會に於て働くべく依賴せらる、

十九日午後神戶教會老人會に臨席す、之同會より常々雜誌を惠送せらるゝに由り謝禮の爲に臨みたる也、集會三十餘名余に厚く謝辭を陳べて此度所持せる處の傳道圖解に附て說明を爲し、老人等の信仰の參考に供せしに、老人等は非常なる喜びを表し、厚き謝辭を陳べられたり、

夜多聞教會堂にて三十有餘名に傳道圖解を說明せしに之又大なる感動あるを見る、

二十日休養、

二十一日午後神戶教會婦人會の依賴に由り傳道圖解の說明を傳道女學院の樓上に爲せり會するもの五十餘名三時間の長きに渉り、始終感動あり、終りて厚禮を受けて去る、夜神戶女學院に至り八十餘名の女學生に向ふて傳道圖解の說明を爲し、談笑の間に終り、面白かりしと去る、

二十二日休養、

二十三日尼ヶ崎教會に至り、茲に於て兩夜傳道をし厚禮を受けて去る、

二十五日より二十七日まで大坂に於て休養せり、

二十八日より三十日まで京都二ヶ所に於て傳道せり、

五月一日伊勢、尾張、美濃、近江、山城、攝津、播磨の七ヶ國にまたがる長途五十有餘日の自由傳道大旅行は、神恩保護の中に、今や將に一段落を告げて、目出度歸宅せり、此間到る處止る處に於て、多くの祝福と無量の同情を得て、多幸多福の間に、自由傳道の大舉行を爲し得たるは、偏に天父の大なる祝福と、旅中到る處の愛兄姉等の厚き同情とに之由る事と、感恩感謝の情に堪えざる處也。

此日大旅行より歸るや、兄弟姉妹等の間には自由傳道の前途を心配し、且つ其教會の成行をも氣遣はれ居り、余は亦實際之等の前途に於て如何なり行かを知らざれば、數日の間は何となく一同の間に心配の村雲ありしが、余一日大いに奮發して以來、何事をも心に介せず、斷々乎として抱負を叫び續けしに、兄姉等各又奮然として決するものあるが如く、爾來一人も心配するものなく、余は咽喉病の爲めに外出を禁じて傳道に往かず、務めて談話を避け居る事四ヶ月に渡るも、其間聖書を携へ來りて講義を請聽するあり、求道者の來り質問するあり、心靈の不安を癒されん事を求めて來るあり、教會は日曜朝夕集會を開きて、光輝發然たるものあり、紀念會を開きて過去を追想するあり、速刻祈禱會を開き、神德に進んとするあり、傳道の門戶の開かれん事を絕叫するありて、一大勢力の此間に潜むを見る、余が胸中の感謝は日夕胸を破るが如し、又五月以降余等一家五人は、全く月給なく、定約の寄附なく、教會よりの謝儀を受けず、只個人々々の眞情より出る、感謝寄附と、自由傳道贊助の特志を以て、生活し來りて、未だ一日も饑えざるは、實に之天父が鳴小鳥を養ひ玉ふに髣髴たり、豈感謝せざるべけんや

八月十七日余は百有餘日の咽喉病に苦められ、數度神癒を祈りて、遂に播州明石に療養する事を決し、今日教會と家とを辭し、明石なる深安病院に入る

女學雜誌編者白す。以上村田君自由傳道の爲に贊助せられんとする諸君は、直ちに同君に向けてか、もしくは弊社にあてて、書狀或は金資を寄せられんとを要む。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

紫の舍講話

紫苑山人

◎歌は誰にても詠み得べきと

カーライルが凡ての人は詩の脈管を持てる者なりといへりし如く、我が大和歌も亦天下の者何人たりとも、よみ得べきものぞかし。ほの〲と紫の横雲、山の端にはれそめて、うば玉のやみの夜の幕、やゝにあけ離れ行けば、晴れの装ひして、新郎が祝ひの殿を出づるにさも似たる朝つく日、うららと花の梢ににをふ時、あるは日を經つゝ、降りみ降らずみ定めなく、心も袖もうちしめりて、鬱々陶々たる五月雨のころ、迅雷一たび空に鳴り渡れば、則ち一天拭ふが如く、そよ吹く風に、名殘のしづく、若竹の葉末に滴りて、夕月に名のる杜鵑一聲、あるは錦をたち行くが如き、心地せらるゝ秋の林、さては白金を滿地にしきはたして、野も山も新衣を裝ひたる冬のけしき、あるは嬉しとよろこび、うれしとかなし火、四季、三百六十五日、時々、刻々、如何に多く感慨、嗟嘆の情にうたるゝことぞ。

此情を齊へて、三十一文字となし、うたひいづる、是れ乃ち歌なり、何の難きことか之れあらん、おのれが心情を、最も善く知る者は乃ちおのれ自らにあらずや。其のおのれ自らの心情を、僞らず、飾らず、曲げず、隱さず、其のおもひのままをよみいづれば可なり。故に容易なりといはゞ、是れほど世の中に容易なることは、またあらざるべきなり。されど多くの實際を言はんに、決してかく容易のわざにあらず。是れ乃ち其人々の誤解より出づるなり。金殿玉樓にありて、翠簾奥ふかきあたりにものしまふ人より、畎畝の間に嘯く田夫野人、さては巷に犬を追ひつゝ、囀りうたふ酒屋の小僧に至るまで、雅と、俗と、貴と、鄙とのけぢめこそあれ、其あらゆる情緒の精華は、即ち詩なり、歌なり、げに凡ての彼等は、皆詩の脈管を有する者なり。さればわれらとても亦なとか幾多の詩歌的腦髓なしとせん。

請ふ試みに近來よみ出でし少女等の詠を示さんか、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

松上鶴

朝日さす松のこずゑにすむたつは
　ちとせのかずのいかにそふらむ

同

千年をばまたも重ねてひなつるの松の梢に鳴渡る見ゆ

寒松

なかなかにかはらぬ色やつらからし
　松にのみふく風の寒けさ

寒草

おもかげは今ものこりて枯尾花嵐にさやぐおとの寒けさ

雪

枯尾花はすゑおもけに見ゆるかな
　ふゆ野のはらにふれる白雪

同

ふきあれし夜半の嵐の音たえて静かにつもる今朝の白雪

同

さくまでの花として見む庭の面の
　木々のこずゑにつもる白ゆき

時ならぬかれ木にさきし雪の花なれし眺めも珍らしき哉

同

なかむれは向ひの山の松か枝に
　つもれる雪のおもしろきかな

新年

ふしの根ににをふ初日ものどかにて明渡りたる空の色哉

同

呉竹のよのうきふしはなからまし
　としたつけさの心なりせは

冬月

山のはに積れる雪のかつみえて匂ふもすこし冬の夜の月

同

なにはかたきしのむらあし霜かれて
　なきさにこほる冬の夜の月

同

我山の松のこずゑに雪はれてにをふも寒し冬の夜の月

是れらよみ初めのものとしては、如何にも感ずべき歌にあらずや。余は是れより號を追ひて、よみ方をかたらむ。

開書

奉團洲堀越秀君閣下書

（其　二）

青柳　猛

英吉利文學の歷史に、技藝派とぞ稱ぶアートスクールなるものあり、徒に外形の潤飾彫刻に力をいたして、詩歌本來の大義を忘れ、以て我が事終れりとなすが如し。否な忘れたるに非ず、彼れを以て之よりも重しとするなり。是に於てか、一讀まことに其配辭の巧みにして、調句の美はしきに驚くと雖とも、再讀三誦するに至れば、何物の遂に味ふべきものなきに啞然たらずんばあらず。吾人を以て觀るに、かの寺島君の如きは、即ち我邦演劇界のアートスクールに屬するものにして、偏に其技の巧緻微細に到らんことを求めて、しきりに之を修め飾るに忙はしと雖とも、未だ以て、劇の神髓に觸ること、閣下の如くなるもの能はざるなり。その劇を演ずるや、佛造りて靈入れざるの類にして、磅礴たる藝術の精靈の、凜然として人の衷心を襲ひ、毅然として之を感激せしむることあるなし。然るを、人の觀て以て、なほ之れに悅ぶ所因は、たゞ其美はしきと巧みなるとに欺かるゝものにして、恰も兩國の花火と團子坂の菊細工とに悅ぶが如く、しかく淺墓なるものなり。されば、其影響するところ又頗る淺く、半日半夜の長見物も、遂に一物を觀客の胸底に刻むこと能はず、塲を出でゝ回顧すれば、之を看しもの其失ふところ多くして、得るところの甚た尠なきに驚ろかざるはなからん。されば、寺島君の技に看るは、なほ華胥の夢に遊べるが如しといはんか。其快樂や一時のみ。依りて思ふに、尾上菊五郎丈なるものは未だ劇の主宰者たる能はずして、なほ劇に使役せらるゝ奴僕たるの譏を免れず、終始齷齪として、絶えて安んずるところなきに似たり。されど、閣下に至りては即ち之れに反す。」世に『一生懸命』なる語あり。凡俗は之れを以て技藝家一代の心掛けの如くに言ひなすと雖ども、『一生懸命』とは、これ藝術と戰ひつゝある初心者のことにして、もし足一たび其堂に入らば、命を賭して藝術と戰ふの要なく、即ち茲に『一生懸命』以上の界に逍遙して、放に藝術を使役し得るものとなるなり。かの餘祐の綽々たるものあるは、始めて此の時に

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

於てす。今閣下の演せらるゝところを看るに、既にこの『一生懸命』の覊絆を脱して、その技の凡て自然に出づるものあるは、吾人の深く感歎措く能はざるところなり。故に閣下や、實に藝術の奴隷に非ずして主宰者なり。その悠々として迫らざるもののあるは、之れがためのみ。加ふるに閣下の劇の神髄に觸れ天地の大義に感應せることや、一たび閣下の技に看しものをして、十年百年終生遂に之れを忘るゝこと能はず、銳き名刀に其心膽を貫かれたるが如きの思感あらしむ。その影響と感化とはまことに永久にして、かの寺島君を看て受くる快樂の、夢の如く雲の如く瞬時にして消散し去るが如きにあらず。是れ吾人が寺島君を目するに藝人の秀ぐれたるものを以てし、閣下を目するに一世の英傑を以てせる所因なり。又之を譬ふれば、寺島君は巧妙これたゞ競ふ象牙細工の彫刻の如く、閣下は利刄霜を生ずる一尺の名劍の如し。之を英吉利詩人のうちにもとめなば、閣下は即ちミルトンに似て、寺島君は即ちトーマス、グレーたりといふべけんか。もし夫れ市川左團次丈に至りては、可もなく不可もなく、圓滿にして欠けなき君子に似て、かの玲瓏たる晶玉を以て之れに比すべきか。然りと雖ども、閣下は之れと異り、覇氣まことに滿々として、萬人を壓服するの槪あるを見る。一代の英傑素より然かあるべきなり。故に以爲らく、菊五郎丈は徹頭徹尾純然たる藝人にして、左團次丈は君子たり、而して團十郎丈たる閣下に至りては、明治年間の一大英傑なりと。

されど、英雄を識るは、英雄の資あるものに非ずんば能はず。是に於てか、かの浮華逸遊にして、いたづらに皮膚の歡樂に狂奔する江戸人種の、閣下の技に悅ぶ能はずして、近頃しきりに寺島君の賞讃者となるに至れるは、素より理の當然なるものなりと雖ども、閣下が一代に超越せる人格を識認し、之を欽仰し畏敬し拜崇すること能はざるは、豈に帝城の下に王澤を蒙むる江戸人種のために、至大の恥辱なりといはざるを得んや。殊には、天下の木鐸たるべき記者輩に及ぶまで、この浅薄なる人氣に附和雷同して、音羽屋贔負の聲を盛んにし、閣下の高名を押し潰ぶさんとするの傾あるに至りては、實に俗論の天下を誤まり、英雄を傷くること多きに泣かずんば能はず。吾人は此くの如くして閣下の晩年が、漸く惡聲裡に葬られ終らんとするにいたく悲むものなり。是に至りて、閣下

奮發一番するところあり、以て其終りを花々しくし、著しく我が邦演劇界の進歩に貢献するところありて、靜かに揑槃に入るの心なき乎。

吾人を以て観るに、今日演劇界の通弊は、凡ての俳優なるものが、興行主の利害を重んずること少なく、興行の責任を負ふこと、甚だ薄きにあるが如し。是に於てか、出勤の俳優は、座主の収支相償ふべきや否やをも顧みず、しきりに其給料の騰らんことを希ひてやまず、座主は其失費の多きに負けて、興行毎に少なからざる損失を招き、遂に劇場を支ゆること能はざるに至るもの丶如く、何れの劇場も財政の紛紜を断たざること甚だ稀れなるの観あり。ひいては、場代の無法なる直上げとなり、遂に芝居道の衰滅を招くべき一大悲運を來らするや、必せり。豈に憂ひざるべけんや。是に於てか、吾人に之れを救ふの一策あり。即ち閣下自らかの歌舞技座を一手に讓り受けて其座主となり、閣下自ら財政上の責任をも合せ負ふて、之れを興行せんことなり。閣下にして若し其座主たらば、門下の俳優の如き素より閣下の命のまゝに動くべく、閣下又自ら諸種の情實を排して、無益の失費を減じ、今日歌舞技座に得る如き大金なくして、なほ能く其妙技を演じ其日常を樂むに不足なきに至るべし。閣下にして又此くの如く其座主たらば、入と不入とは直ちに閣下が頭上にかゝはる所なるを以て、狂言撰擇の如きも一層其の精を増すべく、芝居道の興隆期して待つべきなり。かの大詩人シェークスピーヤの如きも、その始め俳優にして、しかも二三劇場の座主たりしに非ずや。天才は凡て其實質に於て一なり。俳優として非凡の偉人なる閣下は、豈に又座主として非凡の事務家たる能はざるの理あらんや。豫言者マホメットは能く劍を取り政をしけり。閣下が一劇場を運轉する如き素より一擧手一投足の勞のみ。閣下それ吾人の勸告を容るゝの勇なきか。敢て尊慮を煩す。

時や、すでに立春を過ぎ、天地將に笑はんとす。幸に自愛し給はんことを。茲に謹て光榮ある閣下の康安靜福を祈り奉る。頓首敬具。

（我れ近頃筆の勢ひ盛んならず。この開書前後二篇、滿腔の熱情を瀉ひて、しかも文の最も拙なるものなり。一代の英傑に奉らんとして、此くの如く格らざるものあるは、深く慚愧に堪えざるところなりと雖ども又止むなし。讀者幸に諒焉。有美手記）

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

講美

粧飾論一斑（上）

山形東根

（一）天然界藝術界に於ける粧飾の用並に價値

吾人は凡て眞理と善德と美妙とを愛するの天性を有する者なり。少なくとも眞善美の三者を兼ねざる者は凡て完全なる資格を欠く者なり。夫れ已に眞理を愛す、故に不合理にして矛盾せる所を排して其蒙を啓かんとするなり。已に善德を愛す、故に奸佞邪悪を斥けて其僞曲を矯正せんと欲するなり。已に美妙を愛す、故に醜穢にして固陋なる者を斥けんと欲するなり、吾人の心性は此眞善美を愛好慾望する程度によりて其發達の狀態を測量し得べし。

抑も粧飾とは何者ぞ、曰く天然界に存在する狀態に滿足せず、多少己が理想を加味し之を欲するが儘に造りて其間より一種の美感を得んとする之れ天然界の粧飾なり、庭園を造り草木を植え鳥獸を集め所謂園藝術を爲すは是なり。吾人は無機物、植物及動物の三者より自然の美を視ることを得べし。而かも之を天然の儘にせず多少の手入を施すことを爲さずんば止ず、此等を指して天然界に於ける粧飾と云ふ。一方より見れば天然物は自然に粧飾せられて又一點の彩色を要せざるか如きも天然の美は人工を加へて更らに一層の妙を增したるは事實なりと云ふべし。

次に藝術界に於ける粧飾とは、其範圍頗る廣く、繪畫彫刻を始め衣食住一般の物に對する粧飾にして、古來野蠻時代より盛んに實行し來りし所とす。蠻人の如きは身體を粧飾すること盛んにして頰、唇、皮膚、耳、鼻等に至るまで幾多の粧飾を爲す、理髮法も亦其遺習として見るべきものなり、人類は何か爲めに粧飾するかの問題は、人性美を好むの情あるが爲なりとの一言を以て釋義し得べし、粧飾の用は全く吾人の美感を滿足せしめんとするより來れるものなり。若し一朝にして自然及藝術界より粧飾を排除し去らんか、美妙の過半は已に消滅したる者なり、何を以てか美を感ぜん、人生美の要素を欠くれば、眞理善德亦其光輝を失せんこと明かなり、粧飾の用大なりと云ふべし然り而して粧飾の價値は其用大なるに從ひて

貴きものなりと雖も野蠻時代と文明時代とを比較すれば、其價値に高低の別存するは覩易きことなり。

未開社會の粧飾は概して濃厚なり、故に眞紅の如き感覺し易きを欲す、之を小兒の愛好する繪畫、衣服の彩色と田舍人の愛好する者とに比較せば其理自ら明かならん。小兒と田夫野人とは錦繪を好み眞紅、紫、等を見分くるの能あるも、文人畫、淡泊なる模樣等を好まざる者なり、彼は遠近の法正しき光線學に基けるの繪畫なるや否やを解せず、唯其鮮麗なるに着眼す。一事以て萬事を推すべく衣服、家屋、室內の粧飾亦此の如し。

夫れ美術の要は、高大なる思想を活潑に運動せしめ以て崇高優美宏壯偉大鮮麗等の美感を起し、人生をして快樂ならしむるにあり。野蠻人、小兒、及田夫野人の如き心情の開發せざるものは、大人、文明人の見て以て下劣と爲す所を以て快となすは、亦止むを得ざる者なりと雖も、藝術の歷史を大觀して之を論ずれば、彼等の粧飾の價値たる甚だ少なきものと云はざるを得ず。

然れども其精神開發の度に應じて相當の粧飾を爲すを看れば彼等自身に取りては素より相應したる所にして、其價値の大なる外部より瞥見したるが如くならざるは言を俟たずして明かなり。

(二) 粧飾上の注意

粧飾上に於て注意すべき件種々ありて存す。

第一、畫學の一般法を學び、之に依りて凡て粧飾を爲さゝるべからず、畫學に在りては遠近法、(光線學上の規則に基ける)色の配合、等を究むるを要す。眞正の粧飾は畫學の智識なき者の能くせざる所なり。

第二、理想高く趣味廣ければ粧飾も亦從て高尚に至るは明かなり、之に至らんとせば先づ最も進步せる社會の狀態を知らざるべからず、開化せる種族の嗜好は何れにありや、其美術と稱せらるゝものは如何なる程度にありや、之を比較研究するを要す。

第三、有名なる粧飾品、及其仕方を見ることを要す、例へば博物館、美術展覽會、商品陳列所を始め名家に出入して其室內粧飾より一般の嗜好を知らざるべからず。

第四、古來粧飾の變遷せる所を尋ね其發達進步の歷史を知

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

りざるべからず、とは美術史、風俗史、等に據るとを要す。
以上は粧飾の法則を知るに注意すべき條件の重もなるものとす。而して之れ衣食住總躰に應用せらるべき言なり。

(三) 人種との關係

粧飾と人種とは大に關係する所深し、地球上南方に住する土蕃は一身躰を粧飾し、北方に住める土蕃は其衣服を粧飾するは一定の法則とする所、蓋し温暖地方の者は身躰を顯露する部分多ければ美麗なる繪具を以て彩色を施すなり、繪具は黑白赤黄の諸色を嗜好するが如し(ク氏の說)各野蠻人に於ける男女の粧飾は悠長に失するの嫌ひあれば之を略す、唯一言すべきは粧飾は人種の性質より影響するとあり、又其粧飾より人種の性質上に影響するとあるの一事なり、假令は身躰上に粧飾たる文身の如き或る社會人士の間に流行すれば、此社會に入るもの大概ね此風に倣ひ氣象も亦漸く變化するが如し。

史傳

楓内侍（故祝所敦子）

落花淡人

余は近代の歌よむ人に就きて其作を聞くと多からず、むしろ之に緣遠きものと謂つべし。然し乍ら、はざと其緣を近くせんと欲せしともなく、たゞ心ゆく人の心ある歌を折節に朗吟して些さか吾が慰さめとはせしのみ。此の主旨に於て、余は近代に只二人を撰び、其他の人の歌は余り多く讀まんとするともせざりき。二人とは、物部安房、楓内侍の二人なり。安房先生の歌は、想に於て優り、内侍には調に於て優る。想に於て優るものは、聯想條融を引き、人をして言外無限の微旨に醉はしむ。調に於て優るものは、風韻麗諧、淡如として反つて醍醐の味あり。同もに余が輩の近代稀れに有る秀逸として珍重措かざりし所なり。
然るに、其一人を失ひて恨思綿々盡きざる時、今復た他の一人を失なひたり、本年御題の歌に、内侍が上まつられしもの

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

に、大庭の松の林の深ければむれゐるたつの數も知られず
とありき。如何に落想の新鮮にして、尚ほ格調の玄妙なるや。吾等は此の後に於て復たかゝる新らしき神韻に接すると能はじ。乞ふ今ま内侍が舊作中に於て、久しく后人が心を驚かすべき名吟を抜き、試ろみに朗唱して暫しの心やりとせんか。

水鳥

一つかひならひてをしの行みれは水の上にも道はありけり

磯浪

あら磯の岩にあたりて砕けすは浪にも花は咲すそあらまし

ある女學校のもとめによりて

をとめ子の學の窓のくれ竹はふしたゝさるやみさを成らん

此等敎への歌は兎角に理りにのみ流れやすくて、道歌に趣味深きと云ふは稀なるに、一と度び内侍の吟に上れば、想と調と双び至りて余情滴たる如し。左れば、風流のゆかりも薄く詩題に上るとも少なげなる俗用俗臭の器物も、内侍の手の觸るゝ所か、悉とく春を生ず。左の數首をきけよ

硯

打むかふすゝりの海のなかりせは我思ひ川いつちやらまし

鐵道

大君の御代はさかえて黒かねを道にしくまて成にけるかな

其の嘗て舞踏會を詠じて、

打とけて舞あそへとも黒髮の亂るるすちはなき世なりけり

と歌はれて、幾多の人の肝膽を寒からしめけん、快ちよき言ひぶりにて、昌代祝詠の模範となすべし。又、はけて内侍の奇才を弄せらるるは、其の古人を詠ぜらるる時にてありけり。

在原業平

岩かねの心をしらてたはれしかなみのぬれ衣きせてける哉

小松内大臣

親を思ふ道に盡しゝ言の葉や人のこまつのしをり成るらん

徐世貴

雲の上にすますなりても世に照す影はかはらぬ片はれの月

内侍の貞淑にして而かも戀の秘義をよまれし歌の中の秀逸に、

思不言戀

紅の色にみえなは岩つゝしいはぬおもひのかひやなからん

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

驚戀

うき人のこゝろの秋におどろきてこほれ初たるそての露哉

此外、四季折々の歌、其時々の花となれるは、

霞隔山路

花陰に旅ねせよとや春かすみかへる山路をたちへたつらむ

故郷若菜

古へを忘れかたみにつむものはあれたる庭の若菜なりけり

折梅

はかやとのかきねの梅は君かため折られて後や春を知らん

依風知梅

誰も知らぬ軒ばのうめの花はれにはかせのをしへつるかな

行路春月

なつかしきおほろ月よを春柳のかけふむ道にふかしつる哉

思ふとわりけるころ春の月をみて

今は世に影もとめしと思ふ身のこゝろをしるや春の夜の月

雑

待花

子を思ふやけののきしのこゑきけは煙となりし親ぞ戀しき

みな人にまたせ／＼てさかぬ間の花の心のなかくもある哉

船誘卯花

舟よせてをらんとすれは卯花の咲る河きし高くもあるかな

郭公數聲

なけはかく鳴ぬるものを郭公なにゝ惜みし初音なるらん

嶺夏月

暮るまで聞えしせみの聲絶て月になりけり峯のまつ原

夏月入窓

夕涼みかへりて見れはわが窓との内にも月のさすよ成けり

對泉見月

散うかふ松の古葉をかきやりて水底清き月をみるかな

終夜聞虫

終夜まくらにすたく虫のねは夢のうちこそ絶まなりけれ

旅宿聞松虫

松虫の鳴聲にけしたひねする宿の垣ねや野につゝくらん

秋夜長

ねさめして老かむかしをつく／＼と思へは長き秋の夜半哉

月の歌とて

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

世の中を思へはなれてなかむれは更にくまなき秋の月

黒髪のすちのまよひも見ゆるまて月の鏡のてらす夜半かな

見月思都

てる月にむかふ心のかはらすは都の友も我を戀らむ

依月客來

とははやと思ひし人にとはれけり月よは同し心なるらん

雨中菊

霜おほひする人もなき山かつの垣ねの菊にしくれふるなり

暮秋殘菊

暮てゆく秋の心やのこるらん霜のまかきのしらきくの花

風前殘雁

紅葉みな散にし山のこからしにさそはれ渡る雁もありけり

庭草帶霜

亂れてもつかねぬ庭の荻の葉は霜の結ふにまかせたりけり

嶺上冬月

みるものもなしと思ひし冬枯の嶺に出たる月のかけかな

余は惟ふ、明治女文學の中に於ける二大損失は、曩に一葉女史を失ひしことと、今ま楓内侍の散り逝れしことの二つなり。

亞米利加だより

歐米文界通信（上）

筱下庇（紐育府一月出）

（上略）……飜つて英米の文壇を見るに、矢張り寂寥々として殆んど記するに足らず候。若し出版物の數よりすれば、去一年は隨分盛んなりしとも云はれ候はんかなれども、其内容にて申さば、唯だ一二を除きてはつまらぬくりかへし作のみに候。而して、昨秋英語文界にて尤とも注意すべきものは、傳記及書簡文の出版の多かりしことにて候。例せば、ロバート、ルイス、スチブンソンの書簡のシイドニー、コルビン子に依りて編まれたる、ジョン、ミレーの傳記及書簡の其子に依りて出版せられたる、その他サッカレー、アルノルド、沙翁、フランクリン、ゴールドスミス等の傳記續々として出版せられ候。而も多くは同じことをくりかへし候のみにて候。繙讀に價ひするものとては更に御座なく候。唯だスチブンソン及ミレーの書簡は、なか〳〵に興味深し、殊に前者は昨年

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

初夏の頃よりしてスクリブナー雜誌にのせられそめし以來、非常の歡迎をもて迎へられ候。小生の見る所をもて評すれば、スチブンソンの嘗て爲せし總ての著作よりも一層おもしろく讀まるるものと存ぜられ候。御承知の如く、彼は英國小說家としても無論第一流にはこれなく、その著作の多くは、小供相手然たる無邪氣にして、愛好すべき點は多しと雖ども、眞に人生の幽玄なる處にタッチせる文學は殆んど彼の著作を通じて見られ申さず候。思ふに彼は小說家としてよりも、一種の温厚なる人物として愛すべかりしなり。故に彼の書簡は何れも能く其の人物をあらはし、いき〳〵として眼前にスチブンソン其人を現ぜしめ候。彼は日本の思軒先生の如く、交際づきの人物なりしかば、其交友あらゆる方面に渉り居れり。現今生存の名流中に幾多の舊友を有し居候。然し乍ら、其の書簡の中にある如く、彼がゾーラを好かず、モーパッサンを愛せずして、却つてドーデを愛せし點よりして、彼の文界に於ける位置は所詮推し量られ申すべく候。キプリングも昨年の文界にはもてはやされし。一人にして而も何事もなさゞりし一人に候。小生が紐育に着せし當時、彼は正に病みて紐育にありき。彼米國にあるや、彼は米國にもてはやされ、彼も亦た米國をほめたて申し候。其の米國雜感を讀むに、なかなかに如才なしと見受らるる處澤山これあり候。要するに彼は時好記者にして、彼の獨逸のひねくれ哲學者をして言はしめば、所云ゆる the person who live on Literature 的文學者たるに過ぎずと被存候。ある記者は評して曰く、彼は到底一流をもて位すべきものならねども、彼は永遠に其讀者を失はざるの文學者なりと。小生は其の實否は知らず候得共、唯だ時と云ふ長きはかりにかけて見る外これなく候。かねて故御令閨の御譯しなされ候小公子の著者フランス、ホヂソン、バーネット女史も、昨秋には一の長篇をものされ候。題して"In Connection With the Dr. Willoughby Claim"と申し一寸長きものに候。小生はまだ通讀せねば評するを得ず候へども、各批評家の言ふ所に隨へば、先づ上出來の由。唯だ欠點とすべきは、其のキャラクターの餘りにわざ〳〵しき處見ゆる、換言せば、何となく人物の役者らしき處とこれあり候由。然し相かはらず、同情に富み、健全なるには何れも同意して、賛し居り候。由來バーネット女史、小供を描くに妙を

得、その十四五篇の著作は、多くは小供を主人公と致し居り候。概してバアチット女史の筆は、けなげなし〵、何處やら樋口一葉の有せし男らしき筆つきこれあり候。言ふ迄もなく古往今來女性にして文學者たりしもの、一つとして皆な男性的女性にあらざりしはなく候。豈唯だバーチット女史一葉女史のみには御座なく候。バーアチット女史、今やワシントンに住み相變らず其の述作をつとめ居られ候。

昨冬十二月よりしてセンチウリー雜誌に出で初めしジョン、モルレーの「ヲリヴオル、クロンウエル」傳は、わけても面白く讀まれ候。こは續々號を追ふて出づべければ、余程有益なる文學と考へられ候。モルレーの傳記批評に妙手腕あるはそのルッソー、ヴオルテールを讀みしものゝ知る處なるべく小生の今さら事新らしく申す必要あるまじく候。殊に今回のクロンウエルを撰びしは、最とも其の選を得しものにて、蓋しモルレー一代の大プロダクションたるべくと思はれまうし候。

隨感

○紳士は金魚の如し

美くしき家庭にて美くしく育て上られたる子は、さすがに美くしきものにて、同じ人間にても斯く迄で品善く出來るものにやと驚歎せらるゝともあれば、飜つて考ふれば、花壇の菊泉水の金魚なども、中々に上品にて、其野生に較れば天地の差あり。是れ非常に手のかゝりたるものにて、手をだに掛れば存外に發達すると、當に人工の妙と云ふべし。余は之によりて善人を輕んずるにはあらねど、善人も斯く造り得べきものと信じ、随がつて悪人を別人間とも思はざるなり。手數と、勞力と、金錢とを費やせば、人品は造りがたきものにあらず。文明も斯の如し、文明國も亦斯の如し。彼の人種論などに拘泥するは、覺の達かざる故と思へり。

○大國とは大人あるの國なり

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

王侯相將豈に種あらんや、たゞ育ちに由る。左れど、育ちの儘にて自から當然の地に就く者は最と稀なり、多くは運による。運とは、大勢と人爲との調合にて出來たる複雜微妙の盛衰に號づける名なり　偉能く大勢を支配し、人爲によつて自己の本領を開拓し、優に一代を統率して、後へに洪水大波の流行を曳く如きを偉人英豪と稱すれども、其人天下に多くあるとなし。大抵、當代十數人に限る。此等の輩、世界の東西南北に生れ出でて、遙かに氣戰精爭を交え、以て其邦土の爵位を上下す。己國の隆盛に他ならんや、單に人傑の有ると無きとに由るのみ

○放任即全權

兵法に曰く、不都合なき限り、出來べき丈け、部下に權力を委任すと。同時に又曰く、上官は部下に絕對無上の權威を有すと。此の二つ交ら代はり立ちて互さに統率の活義を得たりと云ふべし。夫れ、泰如悠々として大いに放任する所のものは、或る絕頂爪上の威嚴に於て斷じて侵さるゝとなき勢力あるにあらざれば、安んぞ其重きを爲すを得んや。此重きを爲得んには、部下の總てが尤とも困難とする所の或る一事を爲し得、部下の總てが尤とも愛措する所の或る一物を棄て去らざる可らず。苟くも然して以て其の重きを爲さば、其の悠々として放任する所のものは、偶たま部下をして全力を盡し、全才を働らかしむるの所以、即はち事の大いに擧らざるを得ざるの理にあらずや。古へより無勢力者の放任は、尾大不振に歸す、この理容易に見るべし。勢力あるものゝ放任の能く事効を擧る所以に至つては少しく深し、豈に後學の潜心すべき所にあらずや。

○事業の生命

當代の多くの事業に生命なきは、素と統率に生命なきに由る。統率の生命なきは、中心一ならず、元首一ならず、團躰一和せず、組織化合せざるに由る。其の何を以つて斯く成れるやと問はば、人の功を急ぐと、分外の重きを負るとに由る。如何に事業に失敗し易き男子め、其家庭に於ては全權を所有するとを失なはざるに非ずや。彼が其の器量相應の分ヅ安んじて、適度の事業に主宰せば、精神活動し、生氣發散し、以て

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

其事業に生命ありしならん。凡そ事業に生命なきものは、伸びず、長ぜず、種苗をだに生ぜざるとの理由を忘れたる也。斯の如くして、功を急ぎ、重きを荷ひ、營々として過勞す、氣の餒えざるもの、精力の枯れざるもの殆んど無し。素と是れ一とかどの才子にてありしに、其の老ゆるよの早きは大抵此の理によれり、惜しまざるべけんや。

○南洲先生の政治學

南洲先生を政治家にあらずと論評する人の言に聞けば、先生は是れと云ふ政務に手を下されしとなき故と答ふ。今の政治を言ふものは、政務を言ふなり、政治學も亦低からずや。海舟先生曾て曰く、政治の訣は大綱を提ぐるのみ、其他は自治放任するのみ、此事西郷以外、曾て瞭解し得たるものあらずと。正に放任即全權の秘密を道破せらる。

○福田行誡師

余は故小野梓君を識らざりしなり、たゞ其の一逸話を記憶せり。小野君一日福田行誡師を見喟然として歎じて曰く、師をして若し政治家たらしめば當世第一等ならんと。余は此の逸話によりて小野君の着眼を高しとし、今に至る迄、其言を忘れず。

○政治學

私心を抱藏して天下の神器に任ず、天下皆な仰ひで觀る、其抱藏する所を隱し得べしとする乎。天下は取る可らず、天下は爲めにす可らず、取らんとすれば奪われ、爲めにせんとすれば斥けらる。只だ能く大公至正にして、初めて民望に適し、民望に適して初めて民安んず。凡そ此般の事、人の爲し易き所ろならんや。其爲し易からざるを修めずして、只だ奪わんとを欲す、其の欲する所ろいよ〳〵適せざる所以に非ずや。嗚呼、今の政治學者は、其の修道の要を失へり。

○取らざるの愛

戀愛は兎に角、涙あるとゆえ、世の空事に厭き果てたる人の心を動かすは當然なり。左れど、人の稟性は茲にも倚は顔を現わし、其執拗き眼を光らするこそ忌はしけれ。彼の下等陋劣

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

なる品は言ふにも足らず、唯だ情熱の故のみと思はるゝ筋すら、男子は其の獲がたきを獲んとする狩獵的情熱を混じ、只之を追ふの間だのみ誠實なり、一と度び獲て情火沈靜すれば其の厭くとの何んぞ輕薄なるや。女子は亦た身を托するに足るや否やの價値を評考すると餘りに冷算的なるが、一たん其祕密を任せてよりは殆んど自暴自棄の極度をもて之に心醉す。過たると及ばざると、兩ながら面白からず、別して殊勝の事とも思はへざるなり。幼な兒が花を求めて泣き、花を得て忽ち棄つるも、水を恐れてすそかゝげ、少しく濡ひてわざと淺すも笑ふ可らず。六尺の男子、妙齡の淑女多くは是れなり。嗚呼、あさ〳〵し世の戀愛や。花を忘れて團子に迷ひ、蝶に離れて毛蟲を拾ふ。何んぞ、默して惜しみ、獨り哭し、眺めて歌うたふの高調子には離れんとせざる。戀愛は之を理想として即はち美なり、之を胸心に湛へて久しく美なり、何んぞ殊更に現實に當てゝ其の終りを早くせんとあせるや。

○戀の淺瀨

固より人の一と度は爲すとゆえ、戀するなどは言はねど、戀の淺瀨は速やかに渉り越して、早く彼岸に達せよかし。彼岸に達して顧りみて淺瀨を見ば、身を投ずるよりは眺めたる方の遙かに麗はしきものなり。其波の朝日に映じて紅き、夕日に映じて淡き、さゝれ石の流るゝ、千世までもと澄き透りたる、而して若き乙女の白き脛出して渉るなど、眺むる人には艶且つ美なるものなり。然れど、同じく身を投ぜんとならば、湛たる深淵、水青く底深き所をこそと思はるれ。

○吁、思ふまじ思ふまじ

思ふまじ、思ふまじ、此の上には思ふまじ、思ひの此上に増長して、吾が心自から制しがたきに至らば何とせん。思ふとは吾が自由にて思ふとに惡しき不都合の筋はゐるまじきと知れど、扨ても苦しきとの彌よ切なるゆえに、先づ自から怖れて之を抑えんとはするなり。然し乍ら、斯る種類の怖ろしさは、魔物を見て恐れ、心に欺しふして懼るの類ひには非ず。怖れて遠ざからんとし乍ら、さすがに又慕はれ、樂んとしつゝ更に殘惜く思ふなど、奇しけれ。女々しきゝ人の云ふは、斯るとをや言ふ。果して然りとせば、大丈夫にはあるまじきとか、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

余未だ信ぜざる也。噫、可なり〳〵吾遂に決す、思ふて私くしし、秘めて一事を領略せんとする種類の野心あればこそ、怖ろしくも亦苦しくもあるなれ。若かず多恨の涙を集めて慈愛の情に浸し、一片博大の公愛に激進して、吾が言ひがたき戀思を寸斷寸裂に附せん。此に於て、胸廓卓落、一身初めて自由に、無限の愛心を獻性の事業に寄せ、唯與へて以て獨り樂しむ。世人豈に吾が心を知らんや、吾が事業豈に主人の情けに通ぜんや。白衣の法士冷々然として寒烏枯木の如くなるもの、必竟消しがたき情火の熾んなる爲とぞ言ふ。

○慈愛聖戀

親は限りなきの愛を其子に盡し、其子の知らざる時にあらゆる備へを爲し、悉とく與へて毫末も惜しまず、而して生命ある間だに之を覺られずとも尚ほ恨む所ろなく、只だ後の爲よかれとのみ祈るらし。戀を寄せて、他の知らざるに熱情の誠をのこし、死するも尚ほ恨みずとする聖なる愛は爲しがたきものか。よし難くとも人は努めずんばある可かず。

○生死分界ありや

幾度び思ふても尚ほ不可思議なるは、生死の問題にぞある。僅かの調子にて一呼吸頓に休めば、生死玆に分れ、呼べども應へず、抱けども感ぜざる、抑も何事ぞや。人皆な此の最期に入るべく、吾父母、吾愛人皆な亦た此最期に入るべく、古往今來悉皆此の最期より離れざるに、今尚ほ人の疑問して解けず、覺悟せんとして尚ほ遺憾あるなど、尤とも不可思議ならずや。然し乍ら、人は吾死後の事を思ひ得、吾は亦た死せし人の事を思ひ得、氣息斷絕の一區域をもて左程の大分界となさんとは、吾の信ぜざる所ろなり。

○たむけ草

吾が故人の事を言ふは、吾が半身の事を言ふに似て、最も恥かしき心地す。悲しさも、ゆかしさも、なつかしさも、誰に向つて告白せんや。白き紙にすら尚ほ面はゆきものなれ。但だ只だ本月本日正に其の第四周忌日に會す。吾と故人との同もに知らぬ未見の人のたむけ草こそ第一なれ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

懐故若松賤子女史

朝比奈天行

おもひなやめる赤誠を
まこと高しと仰ぎみて
涙をそゝぐ人やある

名を權門の蹤によせ
詩を賣る人の多き世に
深山がくれの賤の女の
やさしき腕に名をかりて
たかき理想を世のために
歌ふ澄たる調には
時代時代の歌人の
清き調ともろともに
常世にくちぬ生命あり
名を先進の席にかりて
涙もあらぬ歌反古を
書肆に鬻がん文人の
都に都にみつる世に
良夫あり兒ある身ながらも
絶て婦道を過らず
家庭の務を整ふて
半宵靜にとる筆に
常世にかれぬ血汐あり
泉式部の歌の意に
ふかき哀は宿るども
きみの理想のけたかきに
絶てなそろふとを得ず
紫式部夜をこめて
書き綴たる文の音に
鬼神をなかす天地の
ふかき哀はこもるども
この人生の悲愁の
身に泌み〳〵と堪がたく
流れてつきぬ紅の
同情の雨に身をなして
消えて逝きにし君の身に
なぞろふ可くもあらざらん
想よや斯世の詩人に
綠作紅葉柳浪の
くちぬ力にあるなれど
この人生に謎たる
君が涙は一葉の
かぎり識られぬ哀れさと
永遠までもならびたち
悲風に死ぬる世の人の
心の中を潤して
さらに生命の息をふく
人とあらたに造作し
朽ちぬ靈なるものと成す
神のみ業を行ふて
盡きぬ泉と湧出てん

君逝ひてより五年の
夢に長夜の虫の聲
幾秋となく變れども
哀は更に變らじな
みすや早稻田の隱伯に
嘗て媚びたる國民も
今は漆畝にあこがれて
浮華たる蒼生の顔にわく
赤誠もあらぬ微笑に
國を滅ぼす凶色あり
民若ふして老なば
青春の夢の醉ひやすく
醒むるときなく眠るらん
みすや柳浪の若作なる
今戸心中のあはれさに
君閨秀の花の身に
消えぬ憂愁をつゝめるは
春の吉野の櫻樹の
害虫になやみて枯るゝごと
誰かけねたくおもはさる
きみ出藍の才をもて
肯ゐぬ精神をいたけるは
雲際にみゆる芙蓉の峰の
火山の脈に觸れしごと
誰かはねたくおもはさる
花にかかれる夜嵐を
厭ふ歌人世にあれど
君水莖に血をこめて
智慧と生命を献げたる
ああ猛夫もおよびなき
あはれもふかき赤誠に
涙をそゝくひとやある
月にかかれる村雲を
厭ふ聖人は世にあれど
浮世のふかき悲哀に
身の肋骨の腐るまで

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

甞てくるいる國民も
今はた風葉春葉の
凄きわれを解せざる
作凡容の文の綾に
涙をながす世なりとは
新進國と謡ふなる
民の前途の憐れさよ

君逝ひてより五歳の
春は盛者の夢に似て
屠蘇の匂に醉ふみれば
哀はさらに深きかな
みすや綠門に翻へる
わが國旗の緋の丸に
世は泰平の相あるも
いちにひさける詩の巻に
内革命の氣はあがり
外滅亡の聲きこゆ
國若ふして慢らば
咀の神にいだかれて

醒むる時なく滅びなん
みずや都の新聞の
聲歌媛の歌舞に似て
絕て赤誠のあらぬ世に
かの正岡が血に吟む
短詩に獨り生命あり
謠へ我世の詩人よ
朽ちぬ常世の神の歌
崇高き理想の譜にあわせ
斯代を死より救へかし

君閨秀の花の身に
熱き涙をそゝぎたる
人の運命のうきぐさは
多く向ふの岸にだに
咲かで散るなる哀れさよ
花とうたはれ散るとても
あまり恨くはあらざれど
花ならで散る哀れさは
唯人のみにあらざらん

されとひとたび莟なは
たとへ散るとも來む年に
花と匂はて已むべきか
我世に散れる花ならば
彼世の園に咲きいでん
形體に死ねる花ならば
靈のみ園に匂はなん
あゝ世の中の悲哀さに
春おもしろき祝壽の
屠蘇の酒汲む夜にだに
功名はきえて既往の
憂愁になやむ青年よ
詩人は憂き民は泣く
世ゝ惆悵にみつるとも
死して活なはまた更に
滅ふるとのあらされは
一たひ功名きゆるとも
きえたるまゝに蘇生り
聖き理想に生きもせは
世は幸福おほくなりゆきて

春歌ふべくなるならん
この新年の歌の會に
紅絹裏小袖唐織の
帶の留紐つひ解けて
顔赤らめし姫君の
戀知りそめて夜もすから
胸のときめくとあらは
しばし錦褥にゐすわりて
夢見る人や死ぬる人
いづれ浮世の悲愁を
脫るゝ者のあらされは
我世そこきなき悲愁の
かきり識られぬ水底に
生命おします沈みては
たかき理想にうかびきて
この世の眞相を悟たる
君の心を味ふて
愼み深くなりもせは
醉なは死ぬる姫君の
とこしゑまでも救はれん。

雜　錄

海舟先生逸話

◉大久保サンの殺されなすつた日に、三人、深あみ笠を冠つた大キナ男が參りました。肩から懐ろの方へ、何んだか刀を入れて居るやふですから「お留守です」と斷わりますと「お留守なら待つ」と言つて、玄關に上つて待つて居ます中に、馬がパタン／＼音をさせますと、「馬が居るに」と申しますから、「居ましても、留守です」と言ひますと「ソンナラ、馬を貸してくれ、退屈だから、表で乘る」と言ひます。「夫はお留守だから出來ません」と言ひ升たら、「奥方が居られるだらふから、聞いてくれ」と言つてきゝませんから、少し時を經て、「外のものならば、取斗よふもありますが、乘馬の事ですから、主人の留守中に斗らへません」とのとですと返事をしますと、茶をくれの、水をくれのと申して、八釜しくてなりません。外の女はコワガッテ出ませんから、一々

私が出しますと、夫は亂暴で、煙草盆の火入を出して仕舞つて、夫を枕にして、寢て、どふして持て來ましたか、大キナおサッ（薩摩芋）を寢作らたべるのです。私は、杉戸のコチラで、ぢつと番をして居ましたが、夕方になつても、還りませんから、「どふいたしませう、還しませうか、どふ致しませう」と伺いましたら『ソンナラ、あつて見よふ』と仰しやるので、表座敷に通しましたら、ヒドイ勢で、何でも大久保を殺した奴ではないので、其の仲間でしたらふか、誰やらをやつゝける積りだが、それをやつゝけて善いと云ふ一言保證して異れとか言ふとでした。夫で『決して、とめはせんが、其の人ひとり殺したからとて、どふなるものでもない、全躰の勢でコウなつて居るのだから』とか、何とか云ふやうな、お話しで、「夫でも男子だから、見て居るとが出來ん」とか何とか言ふとで、『洋行をして』と云ふとでありました。ソレキリ、少しも來ませんでした。

◉西郷サンは、紀州屋敷の方に居りました時、二度ほどお出になつたよふです。私は十二位でしたが、何だかよく覺えて居ます。極鄭寧なお方で、先生も袴をつけて、お合ひになり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ました。二時間位のお話のやうでしたが、至つて無口な方でした。首の所に傷がありましてネ。

●方々へお出の時、お伴しますのは、三四間あとに尾いて參りますのですが、中々、其工合が六かしくて、叱られました。二三度して大抵分りました。クツヽイて參らねばならぬ折もあり、離れねばならぬこともありまして。ハア、其時は(紀尾井坂の茶店)便所をかりにお寄なすつたので、短冊にちよいと書いて、夫をやれと仰しやつたのですが、何分扱が變で困りますから、少し金を添てやりました。いつでも、向ふが變に思ひまして、眞とに其のバツがいけません、困りました。

新橋邊の骨とう店へ參りました時、外套をめしたまゝで、ちよい〳〵と手を出して取つて御覽なさるので、家の細君やら亭主やらが出て來て、眼張りまして、眞とにお可笑しふ御座いました。私は少しはなれて見て居ましたが、餘り氣の毒ですから、上つて外套の袖をむくつて上ましたら、『何をするのだ』と仰しやいますから、「おうるさいだらふ」と申しました。あとで『あそこの内のやつは、己の顔斗り見て居たが、知つてるのか知ら』と仰しやるものですから、「ナニ、ちと變に思つていましたのでせう」と言ひましたら、『己を泥棒と思つていやがつたか』と大笑ひでした。

矢張り、いつか出ました時に、演伎座のワキで、車が引くりかへりまして、お落でしたが、ぢつとして居らつしやいますから、どふなすつたかと思ひまして、急いで、そばへあがつて見ますと、色々の買物を懷ろや、ワキや、方々へ入れて居らして、其まゝぢつとして居らつしやるから、「どふか遊ばしたか」と申しましたら、『イーヤ』と仰しやいます。夫からやつとお起し申して、私の車におのせ申して、ついて歸りました。どふか遊ばしたかと心配して見ますと、ちつとも何んともありません、『己の躰は修業がしてあるから』と仰しやいました。「ソレナラ、早くお起になれば宜しひのに」と申しましたら、『早く起ると、怪我をするから、ぢつとして居た』と仰しやいました。

(以上、某女史談話)

咲くや梅枝は天下に十文字

(游　舟)

魔酔の記

黒光女史

……………チリン〱と二度續けざまに鳴りたるベルは、例によりて診察時の至れるを報じぬ。スハ、御診察よと、看護婦は書きかけの筆を投じて、あわたゞしく其準備にとかけ出しぬ。

甲行き、乙去りつして、我順番も濟みたれば、醫師に一禮して立ち歸らんとせしに、「明日は施術をしますよ」と。此數語は死刑の宣告の如く、我胸を貫き、全身ワク〱と戰慄せり。何時かは斯くあるべき事と、兼て定め居つれど、さて明日は愈々といふ今宵は、流石心地能きものにはなきぞかし。之が、日頃死を願へる我れの覺悟かと我ながらあきれ果てぬ。

午後の九時といふに、リチネといふ下劑を飲み、靜かに枕に就きたれど、終夜腹痛と嘔吐の爲めに一睡の夢をだに結び得ずして、夜は明けつ。希望滿々たる旭は、朝霞に包まれたる上野の森を透して、和らかき光線を床の上に投げたれど、嬉しくも覺えず、力なく起きて、髮を結び、沐浴をなして、時の至るを待ち居たるに、十時頃使ひ女は我を促し來れり。屠所の羊の如く、トボ〱と刑場に引かれつ。されど、施術室に着きし時は、意已に決し、心定まり、一つの恐怖なく、一つの未練なくして、斷頭臺に上りぬ。

白き布にて顏を掩はれ、注射も終れば、恐ろしきコロヽホルムは、鼻口のあたりにゝほひ初めぬ。恰も、蓐婦の息の如くに。分一分毎に深く激しく、全身しびれ、目眩み、呼吸苦くなり、殆んど魔酔の絶頂とも思はるゝ頃「眠くなりしや」と、遙か下界の方に聞えたれど、其聲の誰なりしかを辨へず。さては最早着手するならんと心の内に考へたる迄を記臆せり。

首尾能く施術を終りて、車にて室内に屍を運搬されしことも、某氏の側らにみとりせられし事も、たえて知らざりき。

而して、短き死より初めて醒めたるの時は、前述の最早着手するならんと考へたる時と、全く同一の感念を再びよび起したる刹那なりしことを悟れり。

されど、猶は暫らくの間は、夢現の境にありて、何が如何にせしやら少も思ひ浮ぶこと能はず。時を經るに從ひ、聞き馴れたる同室の人の話など聞えたるに、初めて、施術終りて

身已に床上に安臥しつゝあるを覺りぬ　嗚呼、僅か一小瓶の劇藥、よく人を殺す。如何に人てふものゝ果敢なく、脆きものなるよ。是に由りて、我思へり。死とは果して如何なる者なるかを。もし、眞の死も、亦我魔醉せる如く再び醒むることある一時の死と同一の者ならば、死其物は、決して苦痛のものにあらず。極めて平和安靜なり。却而、人事全く不省に垂とする間の際ぞ、醒めたる後にこそ、其人の健康如何に由りて多少の苦痛あるものなり。

又死せば、靈魂は肉軀より離去るものなりと聞けり。左らば、かの魔醉せる間、我靈は果して一時此肉より分離せしや、否や。去りて那邊をさまよひしや。又我經驗に徴するに、將に全く眠りに落ちんとせし刹那の我感念と、醒めたる刹那の感念と、同一なりしが如く覺ゆ。然らば、眞の死も、亦斯の如く、生前罪惡の爲めに汚されたる人は怖れ悲み、悔み怒りの記憶を存し、積善の功ある人は、平和幸福、喜悦の記憶を殘す譯にて、是等凡ての記憶は、死といふ永き眠のために一時は忘却せらるゝも、主が、靈よ醒めよとのたまふ時は、再び元の記憶に立ち復るべきならずや。

あゝ止みなん〳〵、凡て不可思議の領分に立入るは、之れ神に對して、無禮の極み・僭越の罪、免かれ難きものなるを。

夢の世か

苔寛の子

何に沈むか　物おもひ
光るまなざし　雲を呼び
白き腕を　ほゝ杖に
たどるは何處　夢の世か

雨を帶るや　梨花一枝
あわれを思ふ　人の子よ
黑き腕を　たま矛に
拂へまがつみ　風神を

本號事故あり「家庭欄」を欠く

寄書

老嬢(オールドミス)論

飛雲生

所謂「氣に喰はぬ」婦人世に多し。老嬢(オールドミス)も亦その一にして、就中某私立女學校出身の老嬢ほど氣に喰はぬものはあらず。

余が所謂老嬢とは大抵年齢二十五六以上にして猶單獨の生涯を送りつゝあるものをいふ。彼女既に中等教育——女子としては高等教育——を受け、また巧に英語をあやつり、氣品また何となく高く見ゆ。此の如く才學秀でたるものにして、徒々婚期を過し、唯女學校の教師、或は婦人宣教師の秘書官を以てその生涯を終るは何故ぞ。而して彼等は上邊のみはさも平氣の快活を裝ひ、談論風發、有髯男子をして顔色なからしむると雖とも 半夜沈々月高き頃、その前途を苦慮し、直言すれば汲々として婚を需むるの情切なり。人のこれを察して媒せんとすれば、彼女は自らの學問を鼻にかけ「あんなでれ〳〵した男」「學問の無ひ人」「町人めけるものなどは」「財産はあるだらうけれど氣品のない人などへは」「聖賢にはちがひないが下婢もつかへず、あんなに貧しひ人などは」とみだりに男子を月旦し、倒罵して餘すことなく、加之セームクラスの友人の婚儀を聞き、遂にはあとの鳥、先になりておのが教へし生徒の嫁するを聞きては、おもてにこそ出さぬ心中にいたく之を羨み、或はおのれを媒せられし人に他の友人の嫁せる後に悔む。

而してその結果は如何、彼女の心はいたく猜疑の念に滿され、冷情酷薄の婦人となり、男子を冷笑するを得意とし、その甚しきに至りては他人のエンゲージにさへ口嘴を入れ、或はその良人たらんとする人を非難し、遂に婚せざらしむることあるなり。此情のいよ〳〵深くなるにつけて今迄は心して媒介をつとめし人も口を噤み「あの人は」と云ひて見返へらざるに至りては、彼女は惡しき意味に於ての女壯士と變じ、所謂「手のつけ様なき」女となる。

抑もかゝる婦人を出せるものは誰の罪ぞ、余は學校教育を責めずして、先づ第一にミス付の碧眼女教師に歸せんとす。何となれば彼碧眼女教師既に彼の徒にして、其青年たるの間遂に婚を得ず止むなくシングルライフを送らんことを決し、而して身を教師に托せるものたればなり。かゝる教師に養成せられたる處女如何で冥々裡にその感化を享けざらんや、彼等の教ゆる婦女子の道は書籍上の道のみ、理論上の道のみ、教ゆる處のホームは理想的のホームのみ、會話のみ、ピヤノ、オルガンのみ、人力車に乗りて十字街頭を横行することのみ 夜會卷の束髪のみ。

嗚呼此の如し良妻の出でざる亦宜ならずや——もとより一二の例外もあるべし、今はたゞ一般に就て云ふのみ——教育既に此の如し、彼女の胸裏に往復するは宣教師的、紳士的生活或は世より「奥さん」とあがめられんとな思ひ、妄想々々又妄想、かくて儘ならぬ世を觀じ、俗の所謂「やけ」を起すのはて、遂にかくなるに至るなり、吁また慨歎すべきにあらずや。

第二は社會の罪なり、男子の罪なり。我國に於て女子の教育の發達せるは近々二三十年來のことなれば、若しかゝる教育ある婦人を見出さんか、格別にこれを崇めそやし、男子は外國風を猿眞似て、彼の女の爲めに靴の紐を解くを甘んじ、またかゝる婦人を妻にせん野心を心の中に起し、何かにつけ「へー〳〵」的に首を垂る。かゝる下賤なる社會あり、かゝる腑甲斐なき男子世に多ければ、遂に彼女をしてこの慢心をいよ〳〵深からしむるなり。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

第三、新界先輩の悪しき模範これなり。先づ彼等の服装を見よ、髪の結びぶりを見よ、束髪を結ばざれば教育ある婦人と思はず、丸髷を見ては頑固者流と嘲るを、また婦風會とか何會とかの先覺者を見よ、西洋人とも日本人とも區別のつかぬ服装をなし、衣服改良で候の、先見者で候のと慢じ事を、これを見、これを聴く彼女は直に之を眞似して以て得たりとなす、——實にこれ一般の基督教徒なる婦人に嫌厭たる一因——此外猶多かれども今は略す。

然り然れどもその責任の最も歸する所は彼女自身にあり。彼女にして今少しく顧みる所あり、考ふる所ならば如何で此の如きに至らんや、況んや我國は未だ歐米の如く婚嫁難にはあらざるをや。而して又彼女輩の素養や未だ幼稚なり、幼稚にして幼稚ならざる人を眞似るは、恰もイソップ物語中の牛を眞似せし蛙と一般なるのみ。

余は老孃を厭ふ、否大ひに同情に堪へざるなり、故に此文を草して以て誡めまた一般の社會に教ゆ、知らず老孃、得意の冷笑を發つや否や。

孃々論（エターナル、ミス）

日本生

老孃非難の聲、外國に於ても多し。米國にすら近頃は其の甚しきを患せり、今や我國に於ても亦た其の萌出んとするを見るなり。何んとなれば、所云ゆる老孃の實際に追々現われ初めたれば也。

物もし其の弊に就て言わば、何ものか嫌ふ可らざるものあらん。もし今日の男子に就て、其の放蕩、其の卑劣、其の無氣力、其の腑甲斐なさ等をのみ列擧せば、何れの男子か顔色あらん。もし、大丈夫、偉男子、武士、美少年等の好文字を忘却し去つて　単に今日の男子の弊害をのみ擧なば如何んとする。

老孃の如き、素より三四固有の弊なきにあらず。左れど、老孃あらざる可らざるの形勢と、老孃か老孃たり得たるが故に生ずる隱然たる効果とに鑑みなば、天下有情の人、決して輕々しく之を弄すべきにあらず。

女子婚期に近づけば「売れはどふする」と人の問ふを常とす。是れ豈に餘計の世話にあらずや。たとひ婚姻は人の自然、女子の希望なりとするも、若し釣合し縁なくして寡居を守るに、何の不思議と不都合とある。

幸わひにして天下老孃のあるあり。長年尚ほ節を守つて容易に顔を落とさゞるの氣慨あるものと、先例とあればこそ、后輩の女性後に其の擇ぶ所を精しふして而も尚は晏如たるを得。彼等が餘りに急ぐをを要せざる所以のものは、世に既に老孃なるものゝ多くあれば也　左れば、老孃は、女子婚を擇ぶの氣節を固くせしめ、愚なる輿論に制せられて　イヤ／＼乍ら手を拍つて早く價を定めるなどの不恥を減ず。老孃あるは、一種の雄鎮あるが如し。

固より老孃あるは、壞なり、常にあらず。彼人自身に於て何等かの不足不滿足あるは免かる可らず。左らば、世の血性男子は之に同情を表し、彼等が理想に適する男子少なしと云ふは、些とか男性の恥辱と感じて、切めては彼等を慰藉するの義侠に出づべし。然るを何んぞ之を罵しるとなするや。

惣じて、老孃を罵しるものに於て、其多くは男子たるを見る。而も血性ある男子にして、多少は契約申込に幾分の手傷を負ひし經驗あるものに於て特に多くを見る。然らば、吾男性間に於て如此き嘲罵を自由にして反つて得たりとするは、寧ろ大丈夫の不面目にあらずや。

故に余は、老孃を以て老孃なりとせば、孃はいつ迄も孃にして、其の孃姐たらんとを希望す。いつ迄も無邪氣にして純潔に、新鮮にして多変に、好意にして信切ならんとを希望す。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

通信

女社會學通信（上）

打前鶴岡の人

（一）男女交際の有様

幼年男女にありては互に遊戯をなすことありと雖ども少年以上の男女交際は社會の制裁之を許さず士族中上流に位するものにありては男子と言語を交ふるを屑とせず家に來客あるときは主婦と雖ども止を得ざる場合の外男子の坐に列することなし然れども平民に在ては大に是と異なるあり男女同坐して茶を汲み談話をなす如きは少しも遠慮する所なし之れ其生活の異なるによる而して士族の間に在ては男女の區別甚しきも平民に於ては左程ならず鶴岡は酒井侯十四万石の城下にして庄內の首府なれば士族は上品を旨とす男女打寄りて談話をなす如きは威嚴を損するものとなす且又貝原先生の女大學は一般士族婦女子の精神を支配し其化今尚存するあり是等の間に男女交際の如きは思ひも寄らぬことなりとす然れども義務及職業に從事する女子にありては時に男子と言語を通ずることあり故に交際と云ふ程にあらざれども男女交際を開くの基ならんか

（二）家庭に於ける女兒の狀態

士族の女兒と平民の女兒とは一見して區別することを得士族の女兒は言語服裝共に上品にして羞耻心多く平民の女兒は自ら平民的にして約に頓着せざる處あり之れ其家風の然らしむる處なり女子を育つるには溫和を旨とす而して其間に長ぜしめんより子供に長ぜしめんとす故に女兒十才を過ぐれば家事に手傳はしめ裁縫の術を習はしめんとす十六七才に至れば一家の炊事掃除の事を分擔せしめ放恣の念を抑制せしむるに至る女兒の遊戯は季節によりて異なり即ち春は雛人形を弄び或は郊外に若菜を摘み又は羽子を弄ぶ夏は納涼を識り又料理事をなす秋は鬼事冬は雪辷り又は雪合をなす

（三）主婦の義務勢力附舅姑等に於ける待遇の狀態

嫁の時代にありては家政上何等の權力なく姑の位を得て始めて主婦たるの權力を得既に主婦となれば外親族近隣に對する付合より內家事百般を自らせざるべからず然れども義務勢力等に於ける特別の狀態あるなし

（四）下女の風習其雇入の方法規約習慣等が風俗及下女に對する家庭の態度

下女の給金は年三四圓より十二三圓に至る之を雇入るゝに何等の規約あるなしただ雙方の協議により業の繁閑に依て給料を定め食料は勿論諸般の雜役は主家の負擔にして盆正月少しく衣類手當を給す又別に期限の約あるにあらず故に十年主家に仕ふるあり一年を滿たずして去るあり風習不正なるにあらざれども多くは下品なり是れ無教育の家に成長せしもの多きが故なり然れども父母其子を愛し所謂可愛兒に旅させるの思を以て其風習の家を擇て奉公せしむるものあり上流士族の下女に此類あり下女を取扱ふに甚た冷酷なる者なきにあらざれども多くは主婦之を教導して家を處理するの道を知らしめんとする如し且又多年勤務の功あるものに對しては嫁入仕度をなし與ふるあり

（五）女子嗜好の傾向

女子にして文字を解するものは小說を好む其多くは近松人情小說にして八犬傳は稀なり士族中にも愛讀せられしものなり芝居は一般婦女子の好む處にして其芝居の上なるを下賤の何なるを問はず芝居と名の付きたるものは歡迎せらるゝに似たり又正月遊戯としては加留多百人一首取り大に好まれ朋友知己互に往來し夜を徹するもの十數日に渉るあり此遊戯は青年男女入交りて行ふことあり

（六）婦女子勞働の狀態

婦女の從事する職業は內職多くは衣服縫裁にして日傭等にして是る男子の勞作に比ぶるも過當と云ふにあらず而して自ら好む處を擇ぶ父母の意見を以て之に從ふと雖も時として父母之を選擇して從事せしむるあり機業に從事するものは最も多數にして絹織を合算すれば八百名以上の工女あり就中羽二重會社は女工のみ百名餘日々增員の勢あり其他羽二重織をなす工女二十名以上を有するもの七戶あり是等は皆其家の女子にして教育あり監督あり風俗の亂るゝものなく朝より夕に至るまで孜々として其業を勵み其織る所羽

二重は平均月に五疋（一十二丈一疋）一疋の織賃奇爾倭等工は九疋を織るものあり絹綾類平均月に五疋（一六丈一疋）一疋の織賃平絹は五十錢綾は八十錢木綿平均月に八反一反の織賃十五錢機業に次ぐものは養蠶及び製糸の業なり養蠶は日給にして上十三錢下七錢製糸は繭一升を繰れば五錢五厘にして一日平均三升なり此業に從事するものは父母の膝下を離れて村落に出稼するものなれば時としては風儀正しからざるものあり、と雖ども概して業に忠實なり裁縫に從事するものは壯年以上の婦人多く其賃金は衣類によりて異なれども日に八九錢を得綿しき草履作り日傭は其數多からず髮結は公けに營業するもの八名にして各二三名の弟子を有す一人の結賃四錢此業は家庭に惡風習を輸入するの虞あるものと認む

（七）婦人慈善事業なし

（八）婦人會の有無

基督教下に屬するもの二あり一はクリスチャン教會派の婦人會にして月に二回の集會をなす聖書講義感話等あり原田ろく子主任にして高木熊次郎氏之を助け一は日本基督教派の婦人會にして町野みゐ酒井清瀨二子幹事にして佐藤やす子諸般の周旋をなし渡瀨昌雄氏之を助く此會にては貧女教育資金を蓄へんが爲め毎月應分の醵金を爲す共に會員數名に過ぎず勢力甚た微々たり又小學女教員の組織せる婦人會あり佛教下には淨土宗に御講と稱して老婦の會合するものあり孰れも勢力事業等の外に顯はるゝものなし

（九）婦女子の教育に關する一般世間の意向

女子の教育も自然重ぜらるゝに至り能ふべくんば小學高等科を卒業せしめんとするに至れり學齡女兒中其八分は就學し貧困疾病等實際止むを得ざるにあらざれば就學猶豫を乞ふものなし之れ當局者の督責によると雖ども又一般普通教育を重ずるに至りし現象ならん高等女學校に入學するもの年々増加し昨年より山形縣裁縫教員養成所を併置せられしを以て裁縫科に入るもの最も多し高等女學校は貴族的にして鶴岡の民度に對しては甚た不適當なりと云ふものあり又生徒一般生意氣なるを惜て教育の必要を感ずるも之に入學せしめざるあり

時　事

○監督教會監督就任式

二月二日東京築地三一會堂に於て、新監督就任式あり。抑も、監督教會の式儀は莊嚴にして、常に余が好んで陪席せんと欲する所ろなるに、尚且つ本邦最始の監督就任式とて、前に曾て有らず后にも最も稀なるべきと思ひつゝ、近來如何なる集會にも欠席する疎懶の而かも此日躍動して禁せず。二日午前十時の例刻、定めに從て三一會堂に臨む。先づ此の會堂や、夙に余が府下第一の聖堂となす所にて、規模中を得、建築幽靜、外光内映其宜しきに適ひて、惣べてけばけばしからず、さりとて在ふれたる殺風景にもあらず、豪大を誇るわざとらしき姿も無し、太たく余輩同人の所望に適せるものなり。晉堂一見、堂前に立つ、導びかれて前面の程好き地位に進み行けば、左右の倚脚早くも人に滿ち、正に半個の餘地もなきに、大波一碧の如く、深沈として聲なし。余が坐の前には、米國公使及び書記官あり、極めて質實、極めて簡素、眞に能く其國を代表して亦正に此堂此式と反映せり。更に一列前に、希臘教會のニコライ氏あり、身の丈七尺、風格堂々、一眼常ならずして更に異相を呈す、黑衣長く垂れ、動靜胸に爛たる、亦是れ一偉觀なり。少らくして、主監督、監督、長老、以下肅々列を爲して入堂す。白銀の十字架最先に立られ、天使の劍、主監督の上に挿さる。黑裳、白衣、紅紫二樣の被衣、飄翻燦爛たり。等々段々左右上下、一百餘人の戒師肅然列を得たり。之よりして朝禱あり、說教あり、贊歌禮拜あり、聖餐あり、而して、就任問答並に按手聖別の本式あり。此際、聖靈の降臨を祈る聖歌の唱へらるゝ所、新監督跪まいて頭べを垂れ、主監督マキム獨吟す。其聲清朗、自然にして能く徹し、其調、高潔靈妙、眞とに稀有の朗吟たり。余は實に未曾て如此きソーロを聽しとあらず。惟ふに府下能く之に匹敵するものは稀ならんと信ず。實にや、一場の獨吟千百の贊歎に優り、人をして尤とも深く感歎せしめたるもの、即わち是なりけん。余は更に他を舉て蛇足を添ゆるを好まず。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●貧民幼稚園の設立　從來設立されある幼稚園は多くは中等以上の女子を保育するに止まり下等社會の子女は其境遇と或る事情との爲めにかゝる恩澤に浴する能はず身邊の悪しき習慣と誘惑とに驅られて愈々その不幸を増し社會に害毒を流しつゝあるは誠に歎ずべき次第なりとて華族女學校幼稚園の森島ミチ子、野口ユカ子は先月十日發企し貧民幼稚園なるものを麹町區下六番町廿七番地に開き名けて二葉幼稚園と云ひ廣く有志者の寄附により滿三年以上就學年齢に達する迄の幼兒中普通幼稚園に入園する能はざる者を保育し居るよし保育料は一日一錢にして毎日之を納めしめ休日又は欠席したる日は納むるに及ばざるの定めとなすなど簡便至極のものなりと云ふ。

●婦人選舉權　島田三郎氏は近日の毎日新聞に於て、遂には女子にも男子同様選舉權を與へざる可らずと論ぜられしが、既に群馬縣甘野堰水利組合會にては、地所を有するものは男女の區別を爲さず、一般に選舉權を與へたりと云ふ。

●伊豫松山　松山高等小學校にては女生徒の服装華美に流れ爲に貧困なる父兄の子女は中途退學するさへあるに依り昨年中其服装に制限を加へて其後一時服装も穏し居たるに近頃に至り金巾に縫紋樣などを施し其品物は安價なるも其染代等の爲め一枚の給に十圓以上を費すもさなりされば之れが爲に又々中途退學者を生ずるに至りしかば學校に於ても其處置に困り居たるが近日父兄姉妹會を開き此服装を禁止なさんと見込みなりと云へり▲松操會の陣容　松山の婦人會なる松操會は昨年設立したるものなるに目下會員三百名以上に及びけるが何れも中流以上の婦人は悉く加入せしめんとの見込みにて近日出募に着手する筈なり

●貞孝　愛媛縣越智郡富田村大字松木の平民白石貢太郎長女梅子（報知新聞二月二日）ゝ奈良縣北葛城郡浮水村大字三倉堂の生坪助蔵娘ふ木（十九）（富士新聞二月六日）ゝ信濃北安曇郡南小谷村農相澤出七妻道子（富士新聞二月二日）◇小石川小日向水道町三十二鮎齋近藤アヤ（四十四）（國民新聞二月十日）◇佐賀縣佐賀郡小關村大字大の原小副川竹一長女關（十七）（富士新聞一月廿七日）ゝ又去月廿五日、賞勳局にて左の沙汰ありたり

愛知縣尾張國知多郡常滑町　下村さう

資性温和能く婦道を竭す夫徳ヵ郎航海を業と爲し常に他郷に流寓して家事を省みず加ふるに祖父母老て交々病み夫の生母夫妹貧窶にして寄食せり是に於て生計愈々窮困に陷るも毫も嫌はず夙に興き夜に寐ね或は機織に從ひ或は他家の傭役と爲り其所得を以て一家の口を糊し且つ祖父母に甘旨を供して承歡益々努む既にして夫覆溺して返らず人或は再嫁を勸むることあるも矢つて節を守りて聽かず專ら祖父母の病に侍し奉養怠る昔語を以て終る其他夫の生母の病を視る亦祖父母に於るが如く、宗村郷黨皆其孝貞を稱す洵に奇特とす依て爲其賞金廿圓下賜候事

日本の女子には身体生命の保護なし	時事新報（一月廿八日）
此頃の好兆（婦人方の側より見て）	報知新聞（二月四日）
家庭の王國（下田歌子女史）	時事新報（二月一日）
家庭の教育に就て（久津見蕨村）	讀賣新聞（二月五日）
才媛月談（土岐愁子、千家信子、松平房子）	千代田日報（連載中）
名家の家庭（岩崎家）	報知新聞
故税所敦子刀自（讀賣新聞、二月七日より）（國民新聞、同上）（報知新聞、同上）（東京日々新聞、同上）（京華日報、同上）（日本、同上）（いなづま、同八日）	
よろづ小言（細君に對する不平の小言）	万朝報（二月二日）
婦人服裝圖案	讀賣新聞（連載）
嫁前茶ばなし	毎日新聞（二月三日）
早婚の弊	若越新聞（二月七、八日）
植田ノブ獄中よりの書状	時事新報（二月三日）
大稻埕の揀茶女（ケンテーツアボー）	楽園日々新報（一月十九日）
第三回時代料理會	讀賣新聞（二月四日）
米國洋行の大塚香留女書信	新愛知（二月九日）
外交逸話（婦人に關しての）	二六新報（二月八日）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

月刊雑誌

無絃之響

毎月一回十一日發行

◎定價表（内國無郵税）

一冊定價四錢五厘〇半ヶ年分定價廿七錢〇一ヶ年分定價五十錢

主義は心中に存する者、言論は其宜しきに随ふ可き而已。世に一二篇二三巻の文を掲げて其る所の主義を此に揚言し以て盛名を晩年に垂れんと欲する者あり。吾人は斯の如きに倣ふを皆好む意なき也。我は百篇千篇月日年紀を經過するに随て、四方の事是とすべきは之れを是とし、非とすべきは之れを非とし、是とし非とし、幾多是非の間始て彷彿として主義の顯はるる在らん、之れを示して以て讀者同人の主義を唱へん、故に必竟我が主義の如何は讀者同人の呼ぶに任して敢て之を鼓吹宣傳せず只だ眞面目に歳月刊行を重ぬるに委し地方未見の同人に一片の主義を傳へんと欲する而已、希ふ望むらくは同人此意を諒せられんことを。我が「無絃之響」は雑誌の爲にせず主義發表の爲にするなり、若し雑誌を作るが爲に刊行するの意なりとせば、讀者に妄言を吐き徒らに奇辯を弄するも可なり、百事を包容するも可なり、紙質体裁に重きを置くも不可なけん、其他鮮巧なる寫眞挿畫版に人目を惹き珍奇無味なる趣考に依つて讀者諸彦の意を擊ぐも皆可ならざる莫しと雖も斯る事は吾人の堪ふる能はざる所、尚ほ且つ本誌の發刊主義に異樣する所、故に余輩は些々斯の如き一ミミヨウグラフ版の小冊子とは雖も敢て自棄することなく尊重の信念を以て之に對し庶幾は其の發達と進歩とは遠く將來に期し以て益々勉め盡さんと欲す、希ふ望むらくは世上特に女學雑誌愛讀の諸彦諸嬡迄吾顔主義に賛して此際益々一讀の榮を與へよ。

明治三十三年二月　巖木露草

《御注文の方々は郵券代用にても宜しく候尚又本會事情其他編輯上の件に付き御相談を申越されんとする方々は何卒本會内荻原守衞氏宛にて願ひ度候也》

發行所　巣鴨村庚申塚　露草會

東京市 婦人雑誌女子之友臨時發刊

第五拾八號 一月二十日發行

才媛詞藻

口繪寫眞版二十葉

常宮昌子内親王殿下御肖像

周宮房子内親王殿下御肖像

北白川宮滿子女王殿下御書

●中島歌子刀自、跡見花蹊女史書●女子高等師範教授佐方鎭子、同後閑菊野子、常宮周宮兩殿下御用掛小川直子 同遠山甲子女史肖像●野口小蘋、武村耕靄、跡見玉枝、佐久間棲谷、奥原晴翠諸女史肖像及畫●華族女學校、東京女學館卒業生寄合畫、●華族女學校、淑徳女學校生徒書●女子職業學校生徒畫●小蘋玉枝門下閨秀諸嬡肖像及畫●女子高等師範學校附屬高等女學校生徒立禮坐禮、東京女學館、女子職業學校職員生徒寫眞

定價 毎月二回發行

女子之友定價一冊金十錢●六冊前金五十七錢●十二冊前金一圓十錢●送料無料●郵券代用一割増●爲替振込所 神田區三河町

記事

「名家歌文」には當代諸名媛の玉什名篇を網羅し「募集歌文」には全國各地よりの應募歌文數万中秀逸なるもの數百首を撰載し「學生歌文」には全國各女學校生徒の歌文を載せ當代女流文學の精華を蒐む

發行所　東京市神田區錦町二番地　東洋社

賣捌所　東京堂●東海堂●北隆館●林平●日黒其他全國書籍雑誌店

故若松賤子女史譯述

再版

小公子

全一冊洋裝美本　紙數三百五十頁　正價金三十五錢　郵税八錢

近代歐米の讀書社界を震動し、劇場に演ぜらるると數十百回、一代の流行を左右して、一時年少の子をして悉皆小公子の如くならしめしと云ふは、此書原本奇代の勢力なり。純潔無邪氣、天使の如き一少年は、頑固執拗の老侯爵を感化す、德に隣あり、母に佳人あり、貧しきを憐み、小作人を愛撫し、言行總て甘露慈雨の如し。讀去り讀來るうち讀者亦自から化せらるるを覺ゆ、何ぞ其の可憐純潔なるや、少年固より讀まざる可らず、婦女老人亦讀まざる可らず　賤子女史嚢に其前篇を譯して世に公にするや、譯文の巧妙を以て亦た一時に喧傳す。森田思軒居士之を以て明治年間譯文の最上乘のものとし、激賞措かず、曾て其第一頁を見て忽ち驚き、一夜通讀、曉に徹し遂に巻を栞る能はざりしと云へり。然るに女史其後篇を公にするに及ばずして不幸長逝し、知人愛惜の情を寄せらるると切なり。即ち嚢に其遺稿を收め、女史が一周忌日に合せんとして前後二篇を合せ刊行せしむ。其友湘煙中島女史は字を題し、郷友松井昇氏は挿畫を附せり、同好の士、希くは一讀を賜へ。

出版元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

大賣捌　東京巣鴨村庚申塚　女學雑誌社

明治三十二年五月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

明治三十二年五月十五日遞信省認可

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY